

ら觀察して五行相尅に配したのである。即ち木は土に尅ち、土は水に尅ち、水は火に尅ち、火は金に尅ち、金は木に尅つ。鹽谷高貞(實は淺は木工頭であつたら木と占ひ、野長矩(實は吉)の拍子木の數は九つ、調子高師直(實は良義央)の拍子木の數は九つ、調子は金聲に響くによつて老陽金と占ひ、四十七戰士は火事裝束なるによつてこれを火と占ひ、五行相尅によつて、金は木に尅てども然も火には尅つことができぬ。故に自波の相尅はれたと占うたのである。「金にして數は九つ」をも見よ。

らんのかち 入部の船の蘭の柁、故郷(歸る唐衣浦島)錦の纜蘭のかち、桂の櫂の船歌に(天神記)

りくせき 二十四孝の陸績が橘を袖に入れ(扇八景)

りようもん 龍のきざしの六六鱗、沸つて落つる水の勢、鱗をたいて龍門の瀧登りとも謂つべく(倉橋山) 龍門に跳る魚も時あれ

因果經

ば漁人の手に落つるとかや(大織冠「龍」黄河の上流にあるといふ。鯉などこれまで登れば化して龍となるといふ。三秦記に「江海魚集龍門」、登者化龍」書言故事に「水經、鯉出塞穴、三月上流龍門、得度爲龍、否則點額而還。」)

呂洞賓が袖の中の青蛇を抛つて黃龍に乗せし(用明天皇)

六種の夢 周禮の占夢に六種の夢をあげて占ふ旨を記せしが(嵯台觀)

塵生が見し榮華の夢(最明寺殿)

王羲之の趙子昂が石に入り木に入る(反魂香)

晋の王羲之(之)の條を見(之)の書いた靈猿探く木に入つたといふ。嘗斷に「王羲之、晋帝時祭北郊、更(脱)服、工人削之、筆入木三分」と見え、また事類賦に「趙少整入木之七分」とありて、註に「晋世北郊祭文、帝命王羲之更寫之、工人削之、羲之筆已入木七分」

と見えである。靈猿の石に入つた故事は思ひ當らないが、元の趙子昂が至大元年に書いた赤巖賦の石刻などは有名であるから、近松がこれ等のことによつてかゝうたのである。

別を天外に求むれば蜀山の雲終に隔り、魂を地下に尋ぬれば巴陵の水轉た流れて留られ(隅田川)

過去も未來も現世で知る(舟渡與作)

現在の果を見て過去未來を知るとかや(今川了俊)

過去も未來も現世で知る(舟渡與作) 過去現在因果經に、「欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因。」 現在(今川了俊)

因果經に據れるもの

(佛書之部)

つて水多き地。故にこれ等の地をいうて文飾としたりたのである。 夫を轟ひ石になつたる女もある(倉橋山)

蜀夫山の故事をさす。五五七頁を見よ。

斧の柯も自らとや朽ちぬべし(國性齋)

さし微妙の御聲、天上天下唯我獨尊、無量の生死今に於て盡せり(釋迦)

「獅子吼」佛の説法は恰も獅子王が咆吼して群獸恐怖する如き威勢あるとの意でいふ。釋尊出生の時周行七歩して止り、右手は天を指し左手は地を指して、我は一切天人の中で最尊最勝であると宣はれた。世にこれを天上天下唯我獨尊の獅子吼と云ふ。因果經一に、「菩薩即便置蓮花上、無扶持者自行七歩、舉其右手而獅子吼、我於一切天人之中最尊最勝、無量生死於今盡矣、其生利益一切人天。」

無量の生死今に於て盡せり(釋迦)
因果經「一に出てるる文である。「獅子吼」を

孟蘭盆經に據れるもの

充滿吾願如清涼地(歌念佛)
この文は孟蘭盆經に見えてゐる。吾が願を満
足に果して心は涅槃佛のやうだとの意。

目連七月の供養も専ら青提女の苦を
救ふ(大衆)
目連は即ち大目犍連(Mahamandalya-
yana)略して、釋尊十大弟子の一である。母
青提女が餓鬼道に墮ちて餓饉の苦を受くるを

大原談義聞書鈔に據れるもの

我通世の昔より衰老の今に至つて、
竊に釋尊御一代の教文を披き、情
ら出離の要を案するに、顯に付け
密に付け其悟り容易からず。事と
いひ理といひ修行やはか成り難
し。只淨土を願ひ他力を憑み、名
號を稱するに如くはなし。有智無
智の輩、誰の人か歸せざらん。…
…顯眞座主問うて曰く、口稱

念佛は偏に愚鈍の機を破るのみ、
全く眞實止觀の妙行華嚴禪門の宗
旨に及ばんや、一文不通の頑魯者
に、罪業を制せずして何程名號を
勤むるをも、いかでか往生を遂げ
んや。いかにかにいかにとありけれ
ば、上人答へて、いやいや口稱念
佛は極善最上の大法なれば、如何
なる極重惡人なりとも、彌陀の名

見よ。

見て哀憐し、これを救ふ法を釋尊に問うて、
毎年七月十五日に百種の供物を三寶に奉るこ
とを教へられ、その加護によつて母の苦患を
救うたと云ふ。これ孟蘭盆會の起源であつ
て、詳しくは孟蘭盆經に於て見よ。
によしやうりやうち(女護身)
「如清涼池」じゆらまんごやわん云云」を
見よ。

號を稱へ奉らば、其他力念佛に無
量の罪障悉滅し、決定往生何の疑
ひかあらん。但ありやありやと仰
せける。永辨難じて曰く、罪業妄
念はさもあらばあれ、自專稱念し
て必ず往生すべきことを許さば、
人皆惡見に任じて罪業を恐れず、
好んで衆罪を作り、妄念を起し、
還つて惡趣に墮すべきなり。然ら
ば一往まづ惡を制し、妄を息るを
以て安心の面とし、最上の罪を恐
れしむべけんや。上人答へて曰
く、諸惡莫作諸善奉行、是佛の常
の誡なり。然るに造惡の凡夫も、
念佛往生するとて、全く惡業を造
り妄念を起せと云ふにはあらず。
愚癡の凡夫更に惡業止め難き事歎
きても餘あり、アア恐るべし恐る
べし。爰に彌陀の本願此の如くの
凡夫を救はん爲、行ひ易き名號を
以て衆罪を點せしむるの輩、事を
他力に寄せ好んで大罪を造るべけ
んや。忝くも念佛は、至極の大乗
にして萬善の妙體なれば、名號の
六字に恒沙の功德備はるなり。…
…智海居士高になつて曰く、
凡そ大乘眞實の理を明らむる是を
實教と名づく。又是心是佛の旨を

存ず、是をば頓教と名づく。今此
宗生佛一如の道理をも明かさず、
偏に厭離穢土の安心を勧め、寂滅
無生の實義をも述べずして、僅に
欣求淨土の行ひを至極の大乗とは
心得ず。……忝くも他力の大道
は、廣大にして五乘齊しく通入す。
圓圓極極無相無念の上に於て、無
方難思の大用を起し、有相修因よ
り直に無相の樂果に入る。是廣大
の念佛大乘にあらずやと、……
凡そ此上人は凡人にあらず、熟至
薩埵の化現と覺えたり(大原問答)
「顯」とは顯教即ち眞言宗以外の宗旨をいひ、
「密」とは密教即ち眞言宗をいふ。「他力」とは
佛の本願力加被力をいふ。「名號」とは彌陀の
名號即ち南無阿彌陀佛をいふ。「愚鈍の機を
破るのみ」とは、愚鈍の機に破らしめたるのみ
の意。「決定往生」とは、往生すること決定で
あつて動くことなきをいふ。「自專稱念」と
は、自ら専ら念佛を稱へての意。「惡趣」とは、
衆生が惡業の因を以て趣くべき所で、即ち地
獄餓鬼畜生を三惡趣といひ、これに修難を
加へて四惡趣といひ、諸惡莫作、諸善奉行の
諸善は衆善ともいひ、七佛通戒偈の二句である
る。衆罪を點せしむるとは、多くの犯した罪の
咎を改めしめるの意。「生佛一如」とは、迷
へる衆生と悟れる佛陀と無差別である、即ち
理體に於て迷悟不二の意。「無生」とは、無生
無滅不生不滅の義。生滅流轉の諸法も、その
實相を達觀すれば本来無生のものである。…五

乘齊しく通入す」とは、驟聞緣學、善薩人間天上の五類の八人が、平等に極樂樂土に往生するをいふ。蓋し淨土門の往生は、阿彌陀如来の他力攝取によるのであるから、如何なる者もただ信ずるのみで淨土に往生することができ、「圓圓極極無相無念の上」に於て無方難思の大用を起し」とは、三身(法身、報身、應身)已に圓で、四智(大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智)復圓であるよつて圓圓といひ、善提既に極め、涅槃復極るが故に極極といふ。有無、善惡、邪正を超越してこれ等の想念なき上に於て、力用動作方位なく不可思議にして、臨機應變能くその功を奏するをいふ。「有相修因より直に無相の樂果に入る」とは、妍醜、有情、非情などの姿勢形體や、善惡の因を修するこゝとや、それ等の執著感果を解脱して善提の果に入るの意。なほ某林子のこゝの文は、次の文に據つたものである。大原談義聞書(延寶五年刊)に、「上人曰、予自通世之當初、至三衰老之中比、竊披一代之教文、情案出離之要義、付顯付密開悟不_レ容易、云事云_レ理修行難_レ成就、然間單_レ進分、顯淨土、憑_レ他力稱名、誠、有智無智誰人不_レ歸哉、而諸行人以為、口稱念佛備被_レ愚鈍機、全不_レ及_レ真言止觀之妙行、更難_レ善嚴禪門之宗旨、於一文不通

頓悟者、……、不制止罪業二者、縱難稱名、不可往生、……、然於彌陀名號者、極善最上法也、雖違罪凡夫、修之得往生、……、永辨問曰、罪業妄念、任_レ他自惡難念必許可_レ往生者、人皆住_レ惡見、不_レ惡難念、好作業罪、起_レ妄念、還可_レ墮惡趣也、然一往先以_レ制惡息妄、爲安心之面、可_レ令惡羅強之罪、如何上人答曰、諸惡莫作諸善奉行、諸佛通也、起造罪凡夫念佛往生云義、全非_レ好造惡業、起_レ妄念、……、愚癡凡夫更難_レ制止妄念惡業、此事數而有餘、可_レ惡可_レ惡、愛難陀本願爲_レ救、如此凡愚、以_レ易行易修名號、令_レ點犯罪咎、得_レ此意之輩何奇事於他力本願、好可_レ造_レ大罪哉、と見え、「萬善妙體即_レ名號六字、恒沙功德備_レ日稱一行」と見え、「智海問曰、明_レ大乘真寶、是名實教、存_レ是心是佛、是名顯教、今此宗不明_レ生佛一如之道理、而偏動_レ厭離土之安心、不_レ述_レ寂滅無生之實義、而僅談_レ欣求淨土之起行、專辦_レ傍權門漸教之法門、全_レ不_レ顯_レ圓寶頓速之宗義」と見え、然他力大道、廣弘五乘齊進入、圓圓極極無相無念果成之上、起_レ無方難思之大用、自_レ有相修因、直入_レ無相樂果、と見え、「此上人口出_レ光明、未代念佛祖師誰敢背_レ之哉、上人行道時、或人夢見勢至菩薩行道、夢覺驚見、即上人行道也」と見え、とある。

義楚六帖に據れるもの

小乘四諦の名ばかりを囀りし鸚鵡さ

へ天に生じ(大覺)

義楚六帖——觀無量壽經

「乘は因人を載せて證果に連ぶ乘輿の義で、佛の教道をいふ。聲聞緣覺の小涅槃を求むる道をも、小乘といふ。四諦」とは、苦、集、滅、道をいひ、小機を誘引する善巧で、何れも密諦不慮の道理であるによつて諦といふ。鸚鵡が佛を請じて林中に法を説かして、後に天に生じたといふことは、義楚六帖にも見えてゐる。

めいかい 唐の明解と云ふ僧は地獄にて詩を作る程の學匠なれども、出家を落ちたる科によつて八萬地獄へ落ちしと聞く(賀古教信)

〔明解〕支那京の普光寺の詩僧であつた、明

觀無量壽經に據れるもの

觀を殺せし惡人は一萬八千人

〔觀經〕とやらん甲す細經五六二頁を見よ。

くほんのじやうせつ 親子諸共九品

のじやうせつに往生す(賀古教信)

九品の淨利に往生し、半蓮を分けて待つて居(分蓮)

〔九品淨利〕極樂淨土。「九品」は觀無量壽經に説ける極樂往生の尊階であつて、生前の起行信心の如何によつてこの差を生じ、即ち上品上品、上品中生、上品下生、中品中生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生(下生)である。「淨利」は淨土の義。利は梵語(Neti)である、國土の義。

解發して其猶如の夢に、明解が地獄に墮して詩を作り供養を頼むを見たといふ。義楚六帖(或云釋氏六帖第十一、神通化物第十六の題下)に「明解賦詩とありて其註に「姓魏、住京普光寺、有_レ才學、善詩、以_レ知解自大、不_レ敬長幼、所食如_レ糞、誦明中微_レ三教實業、因登_レ第歸入道、不久明卒、後有明之親知、夢見_レ手執而泣、在_レ苦處乞_レ進_レ功德、詩曰、搦手不能_レ別、撫膺脚自_レ傷、痛哭時陰短、悲哉泉路長、野風驚_レ曉吹、荒壁落寒霜、留情何所_レ贈、惟思_レ內典章、今_レ見_レてある。續高僧傳、卷二十五をも参照せよ。

光明遍照 光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨(齊庚申)

光明遍照の天蓋は十方世界の雲に覆ひ、念佛衆生の幢の脚攝取不捨の風に靡かせ、欲生我國の提灯に不取正覺の與を照して、中山寺へ送りし(賀古教信)

光明遍く十方の世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨て給はず(偶田川)

觀無量壽經に、「無量壽佛光明、遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨。その意は、無量壽佛の光明はあまねく十方の世界を照覽し給

ひ、稱名念佛を唱へる衆生をば悉く佛の光明中に攝め取つて捨て給はす。皆彌陀淨土に往生せしめ給ふといふのである。念佛宗では「光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨」の經文を攝益偈と稱して最も唱へられてゐる。寶古教傳七墓題のこの文に「欲生我國云々」(五七四頁)とあるは其條を見よ。

願以此功德

願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古) 願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古) 願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古)

願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古) 願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古) 願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古)

願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古) 願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古) 願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古)

十惡五逆の罪人其數無量といへども、親を殺せし惡人は一萬八千人と説かれしとかや(録田) 觀經に即ち觀無量壽經をいふ。淨土三部經の第一、實三歸位、發誓其文一萬八千入云云。

こしふをん

こしふをん 此世の此身此儘にとりもなほさす成佛す、こしふをんとは説かれたり(慶久) 幽幽たる谷に下りてはこしふをんの水を荷ひ、盤盤たる山路に薪を拾ひては十萬億土の月を攀ぢ(卯月調色)

こしふをん 此世の此身此儘にとりもなほさす成佛す、こしふをんとは説かれたり(慶久) 幽幽たる谷に下りてはこしふをんの水を荷ひ、盤盤たる山路に薪を拾ひては十萬億土の月を攀ぢ(卯月調色)

こしふをん 此世の此身此儘にとりもなほさす成佛す、こしふをんとは説かれたり(慶久) 幽幽たる谷に下りてはこしふをんの水を荷ひ、盤盤たる山路に薪を拾ひては十萬億土の月を攀ぢ(卯月調色)

地獄題または地獄道といふ。觀無量壽經に「如是罪人以惡業之故、墮墮地獄、命欲終時、地獄猛火一時俱至。」 *二河白道 三三九度は二河白道、うづまく交みなざる白波(關八州) 水河と火河との二河の間に白道がある。蓋し二河を貪欲と瞋恚に喩へ、白道を阿彌陀佛の信仰心に喩へたものである。觀經散善緣に「譬如有人欲向西行、百千之里忽然中路見有三河、一是火河在南、二是水河在北、二河各闊百步、各深無底、南北無邊、正水河中間有二白河、可闊四五許、此道從東岸至西岸、亦百步、其水波浪交過瀾瀾、其火河亦深幾道、水火相交、常無休息。」

肌に冷の

肌に冷の 破紙子、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、どう願ふこそ哀れなれ(夕暮)

肌に冷の 破紙子、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、どう願ふこそ哀れなれ(夕暮)

肌に冷の 破紙子、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、どう願ふこそ哀れなれ(夕暮)

往生の悲願を念じ、夫人は牢屋の苦を忽ち遁れ給ふとかや(持統天皇) 觀無量壽經に「阿闍世王此語、已令其母曰、……、救世尊希世諸天在虛空、普雨天出、時掌提希世諸天、已慈愛憐憐、適向者開眼山、爲佛作禮、……、見世尊釋迦牟尼佛、身紫金色坐三百寶蓮華、目連侍左、阿難在右、釋梵護世諸天在虛空中、普雨天華、持用供養、……、掌提希世五百侍女、聞佛所說、應時即見極樂世界廣長之相、得見佛身及善樂、心生歡喜、歡未曾有、厥然大悟得無生忍、云云。」

如來の三十二相

如來の三十二相を學び千輻輪の金具をつかひ、眉間白毫に螢の光借りしぞと(用明天皇)

如來の三十二相を學び千輻輪の金具をつかひ、眉間白毫に螢の光借りしぞと(用明天皇)

如來の三十二相を學び千輻輪の金具をつかひ、眉間白毫に螢の光借りしぞと(用明天皇)

願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古)

願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古)

願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古)

願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀佛(寶古)

景德傳燈錄に據れるもの

しんずるばんきやうてん なうお千代、しんずるばんきやうてんと聞く時は、心は境界に随つて轉じ變る(心中胥庚申)

〔心隨萬境轉〕この句は祖師の道へる五言四句偈中の一句である。景德傳燈錄卷二に、「心隨三萬境、轉處實能幽、隨之流認得性、無事復無憂。」

雪折竹に本來の面目を悟り、**脇を切りて祖師の西來意の輪を開きしも尤かな**(國性論)

景德傳燈錄卷三、第二十八祖菩提達磨の條に載つてゐる故事である。種籍以真撰、難波土產卷之四に、「初祖に神光といふ僧來り参するに、祖は唯端坐して教の詞なれば、かの僧疑に立ちけるに大雪降りて竹を折れども退かず、夜明くるまで立ち居たりしかば、初祖憐みて汝何事を求めんためにか雪中にありや

華嚴經に據れるもの

けごんじやくめつたうぢやう、それ世尊一代五千七千の經卷は、そも

華嚴寂滅だうぢやうに始り法華涅槃に書き終る(百目曾我)

〔華嚴寂滅道場〕轉轉華嚴時に説かれた經典を大方廣佛華嚴經(略して華嚴經)と云ひ、その第一卷に、「一時佛在摩竭陀國寂滅道場、始成三正覺」と見えたる。

た如何にして佛と成つたものかを了知せんと欲せば、宇宙間の森羅萬象悉く一心の造作なれば、諸佛も亦然るべきは自ら明白なるにより、己の心を觀察すれば諸佛を了知することが出来る、さればこれを自心の外に求むべきにあらず、心の外に佛なしとの意。

心外無別法、即心成佛(禪九)

この文は大慈禪師坐禪論の中に見えてゐる。吾人が認識する一切の世界は皆各自の心から作出するもので、衆生の心を離れて諸法の存在するものではなく、佛も法も皆心の所作であつて、心と云ひ佛と云ふも畢竟一體であつて、即ち心は成佛であるとの意。華嚴經、十地品に、「三界所有唯是一心」。華嚴經、夜摩天宮菩薩諸佛品に、「心如工畫師、畫種種五陰、一切世界中、無法而不造、如心佛亦爾、如佛衆生然、心佛及衆生、是三無差別」。

にやくじんよくれうち云云

わうくわんしゆちく、こゝに別腹の御弟翌日花人親王は、黃卷朱軸の經典を七寶莊嚴の羽車に盛り積んで(用明天皇)

にやくにんよくれうち三世一切佛、おうくわん法界生一切唯一心(女夫池)

〔黃卷朱軸〕大藏經卷をいふ。華嚴演義章に、「言黃卷赤軸者、今大藏經卷是也」。俗説に後漢の明帝の永平十四年佛教の經典を焼いた時、その紙黃色となりその軸赤色に變じたのみで焼けなかつたて黃卷朱軸の起りであるといふ。黃卷赤軸は蓋し蠹魚を防ぐ爲にかくしたものである。

雜阿含經に據れるもの

雜阿含經にも四種の馬を説かれ(聖徳太子)

雜阿含經に、敏・不敏によつて人の命に順ふに四種類の馬があるとの喩を以て説いてある。

難阿含經卷三十三下、「如是我聞一時佛住王舍城迦蘭陀竹園、爾時世尊告諸比丘曰、世有四種良馬、有良馬、有乘、有顯、其顯影、馳駛善、能觀、察御者形勢、迅速左右、隨御者心、是名比丘世間良馬第一之德、復次比丘世間良馬、不能顯影而自驚察、然以顯影、隨其毛尾、則能驚速察御者心、迅速左右、是名世間第二良馬、復次比丘世間良馬、不能顯其顯影、及觸皮毛、小侵、腐肉、能隨、人心乃以鐵錐、刺其身、微、腐傷、骨、然後方驚、乘、車者、路、隨御者心、迅速左右、是名世間第三良馬、云云。」「鞭の影に驚く馬云云」をも見よ。

止觀に據れるもの

しよきやうしよさんたさいみだ 妙
樂大師の御釋に、しよきやうしよさんたさいみだ緣深厚故と、述べ給ふも深き心や有明の(百日曾我)

〔諸經所講多在彌陀〕常坐三昧の正向の方を明かにせる止觀の文を釋釋し九止觀補行の文である。止觀二に「隨一佛方面(彌坐兩向)とあり、止觀補行(湛然即ち妙樂大師讚)に、「隨一佛方面等者、隨向之方必須正、若隨起念佛所向便故、住雖不局、令向西方、障起既多、專稱一佛、諸經所講多在彌陀、故以西方而爲一准」。

はつしやみだら 五天竺の堂塔を一日に滅却し、八萬四千の僧尼を殺せしはつしやみだらが惡逆を末世の今に見る事よ(女護國)

〔佛沙密多羅〕阿育王の子であつて、佛法を破却し八萬四千の佛塔を毀り比丘を殺した人。難阿含經卷第二十五に、「時佛沙密多羅問諸臣曰、我當作何等事、令我名德久存於世……中有惡臣、不信向者、啓王曰、世間二種法傳世不滅、一者作善、二者作惡、大王阿育作諸善行、今當行惡行、打毀八萬四千塔、時王用佞臣語、即興四兵衆、往詣寺舍、擲諸塔寺云云。」

月を招きし扇 今は上なき雲の峯、月を招きし扇にも、見しはかへらで面影の(百日曾我)

魔佛一如 魔佛一如にして緣によつて魔界即佛界(源義經) 元より魔佛一如にて、死生清淨天然と心動かぬ武士ば、忠に止まり義に止まる(鴨田川)

魔は梵語魔羅(Mara)の略、人を誘惑賊害する惡者、佛陀は衆生を濟度する極善の者であるが、緣によつては魔界と現じ佛界と現すれども、その本體に於ては兩者相異らず、順理と逆理との差こそあれ、唯一無差別、一體不二のものである。止觀五に「首楞嚴云、魔界如、佛界一如無二如」。同八に「魔界即佛界、而衆生不知、迷於佛界、橫起魔界、於善攝中、而生煩惱」。

十王經に據れるもの

閻魔辛三魂を縛して關樹下に至る、二鳥栖んで驚る、一を無常鳥、二を抜目鳥と名づく、我汝が舊里に於て鷓鴣鳥と化して、別都頓宜壽と鳴く(寶古教傳)

三魂の受苦は意業の三番より出る。關は門關で、婆娑と幽冥との境であつて、惡處の初門中有の始途である。鷓鴣鳥は玉篇に「今之郭公」と見えである。十王經に「閻魔法王遣閻魔卒、一名春魂鬼、二名春精鬼、三名縛魂鬼、即稱三魂至門關樹下、樹有刑鞭、宛如錦刃、二鳥栖於、一名無常鳥、二名抜目鳥、我於汝舊里、化成鷓鴣、示惟語、鳴別都頓宜壽」。

勝鬘經に據れるもの

勝鬘夫人は大王の一逼の文を得て、恒沙の衆生を濟度あり(聖德太子)

大王とは勝鬘夫人の父、舍衛國の波斯匿大王をいふ。勝鬘夫人は父の大王及び末利より如

視る目嗅ぐ鼻(酒吞童子) 閻魔王殿の門側の左右にあつて、常に人を視察してある人頭幢のことで、左神は人の惡事を記し、右神は人の善事を記すといふ。十王經に「大城閻魔王殿四面周圍鐵牆、四方開鐵門、左右有種種茶幢、上安人頭形、人能見人間、如見掌中蓮華果、右黑闇天女幢、左木山府君幢、……、左神記惡、形如雜刺、常隨不離、悉記小惡、右神記善、形如吉祥、常隨不離、皆錄微善、總名雙童……、其王以隨推問亡人、算計所作、隨惡隨善、而斷分之。同書に「雙童子形狀偈曰、證明善童子、時不離如影、低耳聞修善、無不記微善、證明惡童子、如響應聲、隨留目見造惡、無不錄小惡、云云」。

末無量の功徳を齎する一書を得て歡喜し、
偈を説いて釋尊降臨の下に三大願を起し、ま
た恒沙の願を攝する一大願を起し、一佛乘
三種人の法を説き、恒沙の衆生を濟度され
たこと、勝鬘師子吼一乘大方便廣經に見え
たる。

佛勝鬘夫人に記を授けて曰く、汝、
如來の眞實の功徳を歎ず、此善根
を以て當に無量阿僧祇劫に於て自

説法明眼論に據れるもの

*一河の流れも他生の縁(編山苑)
「他生」は「多生」である。同じ河流の水をくむ
も此世ならぬ契で、前世からの因縁である
との意。説法明眼論に、「宿一樹下、汲一河
流。一夜同宿、一日夫妻……皆是先世結縁」。
*一樹の縁 一樹の縁の假杖(五人兄弟)
一樹の蔭一河の流れを汲む酒も
縁(雜符) 一樹の宿も他生の縁(編丸)
同じ一樹の蔭に宿るも此世ならぬ契で、前

千手陀羅尼經に據れるもの

枯れたる木とて火花咲く(鳥原蛭合歌)
千手陀羅尼經に「念彼觀音力、枯木華更開」。

*枯れたる木にも咲く花
木にも咲く花の、千手の誓で有難

説法明眼論——智度論

在の王となり、現前に讚歎せんこ
と今の如くにして異なることなかる
べけん(と聖徳太子)
勝鬘師子吼經に、「佛於乘中、即爲受記、汝歎
如來眞實功徳、以此善根、當於無量阿僧祇
劫、天人之中爲自在王、一切生處常得見我、
現前讚歎如今無異。」阿僧祇劫はその條
を見よ。

世からの因縁であるとの意。「一河の流れも
他生の縁」をも見よ。
むすぶ 一河をしぼしむすぶだにこ
れぞ他生の縁深き(西玉母)
日本紀に「樹をよんである。誓を謹めてすく
ひ汲む。説法明眼論に、「或處一村、宿一樹
下、汲一河流、一夜同宿、一日夫妻、皆是先世
結縁」。

き(出世景湧)
千手陀羅尼經に、「念彼觀音力、枯木華更
開」。古今義聞集六に、「うづれの佛の願より
千手の誓ぞたのもしき、枯れたる草木も忽ち
に花咲き實ると説きたれば」。「觀音菩薩の
誓」をも見よ。
觀音菩薩の誓 觀音菩薩の誓には
枯れたる木にも花がさ(歌念佛)
千手觀世音菩薩の誓、即ち「枯木華更開」とあ
るをさす。「觀音」は梵語(Avalokites-
vara)の舊譯、「菩薩」は菩提薩埵(Bodhisat-
va)の略で、菩薩とも云ふ。「枯れたる木にも
咲く花」をも見よ。

智度論に據れるもの

*つづらしゆち 一切種智の光明
に、蠢蠢たる懷生喞喞たる喞
類(釋迦)
「一切種智」萬有の眞體は唯一にして不動なる
ことを大悟すると同時に、萬有各個の差別を
知つて遺すことなき、釋尊所有の智慧とい
ふ。智度論二十七下、「一切智是聲聞辟支佛
事、道智是菩薩事、一切種智是佛事」。
雜部「如是、我聞き云々」を見よ。
最期の一念によつて善惡の生を引
く(女輪)

あ(國性鑑)
千手陀羅尼經に「南無唵囉伯嚩哆囉夜囉、南
無阿彌囉、云云」とある、この大悲心陀羅尼
をもちつたもので、この後の文に「ありや何
といふお經ぢや」といへる、「ありや」に阿彌
囉「をきかせて」「何といふお經ぢや」と評した
語譯、運用驅使の妙を極め、毘林子の靈腕を
いつめながら感嘆せざるを得ない。
南無千手千眼生三世、一聞名號滅
重罪(出世景湧)
「南無」は歸命頂禮の義。「千手千眼」は千手千
眼觀世音菩薩の略。千手千眼觀世音菩薩の御
名を一たび聞くもなほ三世にわたつての重罪
を消滅すとの義で、功力の廣大なるをいふ。

試さうとして自ら厲に變じ、毗首羯磨は端に變じて尺毗王の腋下に進入つたのを、厲追ひ來つて王に端を返せと迫るので、王は己が肉を裂き乃至身を擧て秤に上り、以て端の命に代へたとある故事の翻案である。

佛法は海の如し、ただ信を以て能く入る(大覺)

この詞は華嚴經にもあれど、智度論・卷一に

涅槃經に據れるもの

有明の月をうかがふ猿 有明の月をうかがふ猿よりばなほあだならん(大覺)

到底傳られない從なる喻にいらたもので、涅槃經卷九に「啼如猿猴攀捉水中月」とあるを轉用したのであらう。

一見卒塔婆(永離三惡道)(反魂香)

「卒塔婆」は梵語(Stupa, Ustupa)で、略して塔といひ、方墳・圓塚などと呼ばれ、佛骨を安置する所である。一たび卒塔婆を見れば、永く地獄・餓鬼・畜生の三惡道を離れることができると卒塔婆の功德を説いたのである。涅槃經に「一見卒塔婆、永離三惡道、何況造立者、決定生安樂」。

くじぶごしゆのげだう この響には九十五種の外道通力失せて、地に落ちたるとの縁起なり(用明天皇)

〔九十五種の外道〕外道の總數である。南木涅槃

も「佛法大海、信爲能入」と見えたる。臨終の一念は無量劫を引くといふ(生玉)

涅槃經に臨終の一念は無量劫の間相離れぬのである、以て執念の恐るべきをいふ。「無量劫」はその條につきて見よ。大智度論に「一念五百生、懸念無量劫」とありて、太平記にも出てゐる。

聲經・十に、「世尊常説、一切外學九十五種、皆離三惡道、聲聞弟子、皆向三正路」。

*しやうめつめつ 後夜の鐘生滅滅と響きくる(大經師) 生滅滅己の口説の時雨は寂滅身受の紅葉を染む(扇八景) 晨朝の響は生滅滅己、入相は寂滅爲樂と響きて(舞九)

〔生滅滅〕生ける者は死滅するとの義で、生滅滅己は涅槃經に出てたる四句偈文の一句である。「生滅滅己」は生滅滅己をもつたものである。「後夜」及び「燈籠の夢をさますや云云」及び「四二〇頁」をも見よ。

*じやくめつめつらく 鐘の響きなきめ、寂滅爲樂と響くなり(曾根崎)

はや黒谷の後夜の鐘生滅滅と響き來る、果は寂滅爲樂ぞと(大經師) 別に御思も寂滅いらすと打立ち

て(扇八景) 仕舞大鼓の音までも寂滅爲樂と響くなり(夕鶴)

〔寂滅爲樂〕眞理に冥合すれば、諸惡の煩惱を寂し、生死の業苦を滅して、眞の樂たるの意であつて、涅槃經に於ける四句の偈文、即ち「諸行無常、是生滅法、生滅滅己、寂滅爲樂」の中の一句で、梵經の響にこの偈文の響がある。と云ふ。まづ初夜の太鼓を打つ云云を見よ。「寂滅いらすと」は「寂滅爲樂」を「寂滅入らず」にもちつたのである。

*諸行無常 まづ初夜の鐘を撞く時は、諸行無常に惜しや惜しやと響くなり(博多)

一切の萬物は因緣所成のものなれば、常住不變のものでないとの義で、涅槃經に出てゐる四句偈文の一句である。「じやくめつめつらく」の條を見よ。謠曲三井寺に、「まづ初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり」。

*ぜしやうめつめつ 後夜の鐘を撞く時は生滅法な事と響くなり(博多)

〔是生滅法〕じやくを見よ。世尊は雪山童子の古、四句の文に身をかへ鬼神の餌食となつてこそ正覺を成じ給ふなれ(酒吞童子枕書)

「世尊」は釋尊即ち釋迦牟尼佛を云ふ。「雪山」は地名部を見よ。「四句の文」は四句偈のことである。「しく」を見よ。釋尊雪山にて苦行して雪山童子と云う九時、四句偈を聽かうとして身を難利(眞人思)に投じて怖れず、遂に大悟して正覺を成じ給うたこと、南木涅槃

經舉行曲に見えたる。菩提は山の小牝鹿の、招けど更にこゝろ泉寺、煩惱は家に飼ふ犬伏村(經天天皇)

煩惱を解説して無上正覺に到達し難きは、恰も山の小牝鹿の招いても來ぬが如く、憍怒の迷妄は飼犬の如くに附き纏はつて離れないとの意であつて、來ぬに金泉寺をいひかけ、煩惱の犬に犬伏村をいひかけたるのである。涅槃經卷十四に「煩惱堅難亦復如是、雖二日夜驚心不散、難可調伏、又如家犬不畏於人、山林野鹿見人怖走、顯惡難去如守家狗、慈心易失如彼野鹿、是故此心難可調伏」。

やうりさんあくだうそとは はつと驚き顔隠し、親にもやうり三惡道卒塔婆の蔭にぞ隠れける(扇八景)

〔永離三惡道卒塔婆〕卒塔婆功德の經文に「一見卒塔婆永離三惡道」とあるに據つたのである。「一見卒塔婆」云云を見よ。

あしやちやうり 佛書雜部を見よ。もんぞうあく 夕は戰つ萩の風、をんぞうあくの夢を破り(女夫池)

〔惡情會苦〕人間八苦の一、懇み憎む人にも惡み嫌ふ事物にも會せねばならぬをいふ。涅槃經に「惡情會苦所不覺者共聚集」。

〔惡情會苦〕人間八苦の一、懇み憎む人にも惡み嫌ふ事物にも會せねばならぬをいふ。涅槃經に「惡情會苦所不覺者共聚集」。

般若心經に據れるもの

掲諦掲諦波羅揭諦波羅僧揭諦(女殺)

(天鼓)(以呂波)

般若心經の咒文である。「掲諦」は去るまた度る義、邪見妄執を去つて生死の苦海を度ること、即ち成佛の義である。重ねていふは自ら度するばかりでなく他をも度する意で、其多きを知らしめるのである。「波羅」は彼岸の義、其度して到る處、即ち深般若の大果をいふ。「僧」は普また總の義、「波羅僧掲諦」は自他普く度し、總て彼岸に到るの意。

***色則是空、空則是色、本有一佛の因縁たり(天智天皇)** 死出の山路の山彦は、答へず問はず色則是空、空にたゆたふ赤旗の(千正次)

有形を色と云ひ、無形を空と云ふ。有形の萬物は因縁所生のものなれば本來實有でない、故に色は則ちこれ空である、さやうに有形の萬物は空であるとはいへども、他方から見れば萬物其形體を存してある、故に空は則ちこれ色であるといはれる。般若心經に「色不異空、空不異色、色則是空、空則是色、愛想行誦、亦復如是」。

はらそぎやてい 讀んでばらそぎやていを立てて(萬年草)

般若心經の眞言咒(波羅僧掲諦)を「ぎやてい云云」を見よ(下腹をまかせ、腹を立てたと云)

般若心經——譬喻經

ふに「はらそぎやていを立て」というたのである。高野山の法師としてふまはしい滑稽輕妙の才筆である。

はらみつた 神慮も疑ふ惡念を、心に深くはらみつた、般若坂にぞ着きにける(天冠冠)

「波羅揭諦」この文は、惡念を心に深く孕む(含む意)に波羅密多をいひかけ、般若波羅密多心經の語を取つて般若坂につづけたのである。(序云、波羅密多は梵語である、度と譯し、生死の岸から涅槃の彼岸に度る意である。但しここに用ゐたのはかかる意にいうたものではない)。

ふくふじやちふぞうげん ぶくふじやうふぞうふげんと下なる姫を招かせ給へば(以呂波)

「垢不淨、不垢不淨、般若心經に「諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減」とあるに據つたのである。四大色身五蘊の諸法皆元來有無を離れて空なるが故に、初より生じもせず死にもせず、隨れもせず清まりもせず、増しもせず減じもせず、虚空の形なきが如きであるとの意。

ぼじそあかなる額付 何が日頃法印様眞言陀羅尼讀んだ目で、くどくは御見思ひまゐらせ候と、讀んで

はらそぎ掲諦を立て、ぼじそあかなる額付(萬年草)

般若心經呪文句「甚掘婆羅」に「赤なる額付」(怒つて顔色赤くなる)をいひかけたのである。(序云、「甚掘」は覺と譯し、「婆羅」は成就の意)。

*ほんらいくう 持佛に燈明香立てて給も、本來空の故郷へ歸る旅立ちせんと(鎌倉殿) 昔の罪障消滅して、本來空の都路に皆立歸る友達ぞや(釋迦) 殊にかやうの酒有本來空の人間(酒呑童子枕草) *本來空(萬象は皆假有で、本來實有でない)。

譬喻經に據れるもの

本來空といふことは般若經に説く歸着點である。

譬喻般若でも落人のすはらみつ何ともないと言はせもあへず、才才其腰を此足でげんあごんほうと蹴返すはうどう般若が手並を見よ(弁舟)

般若といふ名だとして迷亡人のする事何も恐れるに足らないと大飲の介が罵り終へぬ中、般若は大飲の介の腰をほうと蹴返し、般若が手腰を見よとの意を、般若心經の文の「摩訶般若波羅密華嚴阿含方等涅槃」にいひかけて面白く云うたのである。

火刑に陥ちし罪人の取付く葛を黒白の鼠噛つて、惡舌舌を振ふといふ苦界の譬に異ならず(眞明寺殿)

佛説譬喻經にある譬であつて、葛を人命に、黒白の鼠を晝夜に、惡語を死に喰へたのである。佛説譬喻經に、「世尊於大衆中告勝光王曰、大王、我今爲王略説譬喻、諸有生處王曰、大王、我今請聽善思、念之、乃往過去於無量劫、時有二入、遊於曠野、爲二惡象所逐、怖走無依、見一空井、傍有樹根、即尋根下灌身井中、有黒白二鼠、互齧樹根、於三井四邊、有二毒蛇、欲噬其人、下有毒蟲、心畏龍蛇、恐樹根斷、樹根斷、五毒隨

レ口、樹根斷、蜂下、蜜取人、野火復來燒、然此樹、王曰、是人云何受之無量苦、實彼少味、爾時世尊告言、大王、曠野者喻於無明長夜曠遠、言被人者、喻於異生、象喻無常、井喻生死、陰岸樹根喻壽命、黒白二鼠以喻晝夜、齧樹根者、喻急念滅、其白蛇喻晝、四大、譬喻五欲、蜂喻邪惡、火喻老病、毒龍喻死、是故大王當知、生老病死苦可怖畏、當應思念、勿被五欲之所吞迫」。

身亡んとするときは災害ならび至るとかや(女護色)

妙法蓮華經に據れるもの

一眼の龜の浮木に値ふ 祐經沈醉高枕、前後も知らぬ其有様、一眼の龜の浮木に値ひ、優曇鉢羅華の三千年の春にあひたる心地ぞや(百目) 骨髁 義助様なればこそ踏破つてお歸りば、一眼の龜の浮木に値ひ、海月の骨にあふ例(千疋六)

値ひ難く得難き機會の喩にいふ。大海と龜がみて、腹に一眼がある。浮遊してゐる中に孔のある大木に値うて之に取付く。偶風が吹らてこの大木を覆す。龜仰向になると同時に、腹の一眼がたまたま浮木の孔に當つて日月の光を見るときふ。莊嚴王品に、「佛無得と値、如三摩曼波羅華、又如二眼之龜値浮木孔」。寶物集に、「人界に生を享けたることは爪の上の土の如し、佛法にあへることは、一眼の龜浮木に乘るが如し」。

聖王、五者佛身、云何女身速得成佛」。梵天王は色界初禪天の主、釋尊は初利天の主。魔王は欲界の第六天主他化自在天である。轉輪聖王は天より輪寶を得得して四方を威伏する聖主である。近松は「速得」と「速身」してゐる。

一心稱名 觀世音菩薩即時觀其音聲(鞋合歌) 一心に觀世音菩薩の名號を稱へて念すれば、觀世音は即時に衆生が名號を稱へる音聲を觀念し給うて、この文は普門品に出てゐる。それを讀上げたるのである。

浮木の龜 珍しや夏仁、浮木の龜とばかりにて、御衣をしばらせましませば、待統天皇歌重法、浮木にあへる首龜(雲經太子記)。

雲雷鼓製電念彼觀音 聲を力に桑原桑原、雲雷鼓製電念彼觀音、臍を隠せと泣きわめく(天神記)。

普門品(觀音經)の中にある文句である。雲雷はたけまき電光閃いて物散るときでも、觀世音を念じる功力によつて消散すべきである。意序に云、この文に「臍を隠せ」とあるは、臍に「雷が響を取る」といふによつたものである。普茶山の筆のすまびに、「雷の臍を取るといひて小兒などを驚むるは、雷のときは俯伏

する者は死せず、仰仆する者は必ず死するに よつてなり」と見えてゐる。

提摩達多品に出てゐる文である。「うもくすみなら」の條を見よ。

おせつなきやうほつぼだいしん この浦の名に寄せ、房前の大匠と名乗らせん、於利那頌發菩提心、變成男子と合掌あり(大難意)

「於利那頌發菩提心」この文も、「變成男子」も共に提摩達多品に出てゐる。「於利那頌」は即刻の意。「菩提心」はその條を見よ。

提摩達多品に、「深人ニ編定了三邊諸法、於利那頌發菩提心、得三不退轉」。 *かんろほほう 此水は觀音の甘露法雨と覺えたり(出世變遷) 羅生門の東西に七重の須彌壇を構へ、甘露法雨ゆれいの法を行はる(以呂波)

甘露法雨甘露は諸神の飲料で美味噴へん方なる、これを味へば死ぬることなしといふ。觀音の教法は、衆生これを味へば無上の利益功德が得られるので、これを甘露の法雨といふ。普門品に、「海甘露法雨、滅除煩惱煙」。甘露法雨ゆれいは甘露法雨慈愍であらう、甘露の法雨慈愍を護すの意。

經には頭目髓腦と説き云云 「うもくすみなら」を見よ。

きんなら 普門品の天龍八部、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅、倉格木(緊那羅梵語(Kinnara)である、人非人)また疑神などと譯す、人に似て一角あり、八

部衆の一で、帝釋天の法樂を奏する神。普門品に、「天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽人非人等」。法華文句に、「緊那羅亦云真陀羅、此云疑神、以人而有二角、故號三人非人」。天帝法樂神、居三十寶山。

具一切功德、慈眼視衆生、福聚海無量、是故應頂禮(田村將軍)

觀世音菩薩は一切の功德を具し、慈悲の眼で普く衆生を視、福を聚集すること恰も海の無量なる如くである。故に觀世音を頂禮せよと、供養を勤め禮拜すべきを頌したものである。この文は普門品(觀音)に見えてゐる。

*くわきやうへんじやう 太子・日天子に向つて三寶の御名を唱へ合掌あれば、忽ち火坑變成の五色の光明御籬を照し(雲經太子) 火坑變成池(鞋合歌)

「火坑變成」假令毒意を興して火坑に落ちるとも、觀音を念じれば其功力によつて火坑變じて池となる。普門品に、「假使興毒意、推落大火坑、念彼觀音力、火坑變成池」。

化一切衆生皆令入佛道、自解佛乘の悟を開き、化一切衆生皆令入佛道の願に適はせ給ひけり(大覺)

一切衆生を教化して、惡を轉じて善を作さしめ、悉皆佛道に入らしめる意。方便品に、「如我昔所願、今者已滿足、化一切衆生、皆令入佛道」とありて、釋尊の本願滿足を述べた偈文である。

城喻品に曰く大通智勝佛十劫坐道場(釋九)

げんばいによしよ
「げんまいによしよ」を見よ。

げんまいによしよ
汝人の虚言にたぶらかされ、街賣女色に身を觸れ、偷盜邪淫の破戒の罪(賢吉教信)

天竺佛の御國には街賣女色と名づけ、唐の帝の女好み、手活の魚と水深き、妹脊の國も傾きて、名を傾國と今の世も人の心を和ぐる(用明天皇)

街賣女色(賢吉教信) 安樂行品に「販肉自活、街賣女色、如是之人、皆勿親近」とありて、法華經普賢に「賢」を「マイ」と讀んである。

國城妻子 經文の通り國城妻子が所望(并簡)

提婆達多品に出てある。「頭目自體」を見よ。

この三界の衆生は皆是吾子と聞くときは、親諸共に到るなりけり(重并簡)

この欲界色界無色界の迷の境界の衆生は悉く是吾子と、佛の宣はれたを聞くときは、佛も我も諸共に涅槃の彼岸に到るのだわいの意であつて、日蓮宗信者の謝恩に唱へる重き詞である。譬喩品に釋尊の詞に「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子」

こんしさんがいかいぜがうきちゆう

しゅじやうしつぜごし(五人兄弟)
「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子」

「この三界の衆生は云云」を見よ。譬喩品に「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、而今此衆、多諸難離、唯我一人、能爲救護」

さいくわきふする 只徒なる鉢の木を御身の爲に焚くならば、これぞ採果汲水の法の薪と思召せ(最明寺觀)

「採果汲水」提婆達多品に、「隨仙人供給所採、採果汲水、捨新設品、乃至以身而作鉢座、身心無厭、于時奉事、經于千歲、爲於法故、精勤給侍、令無所乏」とありて、大法を求めんが爲に果實を採り水を汲んで難行する故事である。此邊の文は謠曲、鉢の木の作誓へである。鉢の木に「只徒なる鉢の木の御身の爲に焚くならば、これぞ誠に難行の法の薪と思召せ」。

三界の衆生は皆是我子
「この三界の衆生は云云」を見よ。

さんがいむあんゆによくわたく(西王母)

「三界無安猶如火宅」有漏の迷界は平安なることなく、火宅につまれば大居宅であること、意、「三界」火宅はその様を見よ。譬喩品に「三界無安、猶如火宅、衆苦充滿、甚可怖畏、常有生老病死憂患、如是等火、燃然不息」

慈意妙大雲、潤甘露法雨、怖畏軍陣中、念彼觀音力(會釋山)

「慈意妙大雲、潤甘露法雨」とは、觀世音の慈

悲心の妙なるは恰も大雲が萬衆を掩へるがやうであつて、甘露の法雨をそいで衆生を惠み給はれるとの意。普門品に「慈意妙大雲、潤甘露法雨、滅除煩惱、靜歇經官廳、怖畏軍陣中、念彼觀音力、衆怨悉退散、云云」

自我憫 塔前に座を構へ一心に自我憫を讀みておはしませ(大覺)

如來壽量品に「爾時世尊欲重宣此義而說レ傷言とありて、「自我憫佛來、所經諸劫數、無量百千萬、億觀阿僧祇、云云」とある

偈をいふ。即ち初の二字を取つて自我憫と名付け、別に之を讀誦する習ひがある。

*じげんじしゅじやう 慈眼視衆生、福聚海無量(編山延) 無量無邊の聚福閣、慈眼視衆生、念彼觀音、身得どうしや(女殺)

「慈眼視衆生」この文は普門品の中にある文句である。「慈眼視衆生、福聚海無量」は、觀世音は慈眼の眼を以て普く一切の衆生を視、福を聚集すること恰も海の水を容れて無量なる如くであるとの意。「念彼觀音」は念彼觀音力の略、彼の觀世音の佛力を念すればの意。「身得度者」は、觀世音は三十三身に化現し以て衆生を濟度し、生死の海を渡つて涅槃の彼岸に到らしめるとの意である。女殺油地獄のこの文は、慈眼寺の觀音堂を福聚閣(のぎき)を見よといへば、普門品の文句の「慈眼視」に慈眼寺をきかせ、「福聚海」を福聚閣にいひなして福聚閣をきかせ、「無量」を無量無邊といひなしたのである。

自證無上道大乘 平等法 若し小乘を以て化する事乃至一人に於ても

せば我則ち慳貪に墮せん(文登)
自ら最勝道大乘平等法を證悟し、その大乘法を以て衆生を教化し、決して小乘を以て乃至一人をも教化せざるべく、若し大乘法を憚んで教へないならば佛自ら慳貪の罪に墮すとの意。方便品に、「佛自任大乘、如其所得法、定應力莊嚴、以此度衆生、自證無上道、大乘平等法、若以小乘化、乃至於二人、我則墮慳貪、此事爲不可」

七難即滅(本朝三國志)

普門品に、(1)火難、(2)水難、(3)羅刹難、(4)刀杖難、(5)鬼難、(6)伽羅難、(7)怨賊難を云ひ、觀音力を祈念すればそれ等の七難を悉く除却されると説いてある。

十界皆成佛の妙經(大覺)

法華經を稱讚した語である。法華經の迹門の中に十界(地獄、餓鬼、畜生、人間、修羅、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛)の衆生皆成佛することを述べてある。故方便品に、「若有聞法者、無一不成佛」を見よ。安樂行品に「此法華經、能令衆生至一切智」と見え

てある。

此妙法蓮華經者本地甚深之奧藏也

三世如來之所證得也(大覺)

法華文義序の文に「此妙法蓮華經者、本地甚深之奧藏也、文云、是法不可示、世間相常住、三世如來之所證得也」妙法蓮華經は諸佛出世の本懷として、佛と佛とのみ證知し、三世如來の證得された甚深妙の真理なるによつて、之を奧藏といふたのである。法華經、安樂行品に、此法華經諸佛如來秘密之藏於諸經中、最在其上」と見えてある。

しやうれんげのまなこ いかに入が
無ければとて青蓮華の眼より盜食
し居るとは、佛の御覽も面目な
し(聖徳太子)

「青蓮華の眼」青蓮華は蓮華の一種である。その
葉廣くして長く、青白分明なれば佛菩薩の
眼に形容して云ふ。妙音菩薩品に「是菩薩目
如廣大青蓮華葉」。

釋尊のこの法華經を説かせ給ふ時、
六種震動し多寶如來現れ出て、今
世尊の説法は皆は眞實なりと末世
の證據に立ち給ふ(大覺)

見寶塔品に、「爾時寶塔中、出大音聲歡言、
善哉善哉彌迦牟尼世尊、能以平等大慈教善
薩法、佛所護念妙法華經、爲三衆說如如是如
是、釋迦牟尼世尊如所說「者皆是眞實」。「六
種震動」はその條を見よ。

しゆくじきとくぼん 十方檀那の福
田宿植徳本の沙門に齋料(并舊)
〔宿植徳本〕前世・過去世即ち宿世に徳の根本
を植ゑること。普門品に「設欲求女、便生福
正有相之女、宿植徳本、衆人愛敬。」

種種重罪五逆消滅自他平等、妙法蓮
華經觀世音菩薩普門品第二十五、
爾時無盡意菩薩即從座起、偏袒右
肩合掌向佛而作是言、世尊觀世音
菩薩以何因緣名觀世音、佛告無盡
意菩薩(徒合觀)

觀世音菩薩は種種の重罪五逆の大惡人も善心
に立返れば其大罪科をも消滅して、衆生に皆

等して大慈悲を蒙らせ給はれる。妙法蓮華經
以下の文は觀音經に見えてゐる。釋尊は大乗
妙法蓮華經を説くこと二十四座から將に二十
五座に及び、時に聽聞衆の中から無盡意菩薩
が其座より起立して、偏に右の肩を現はして
最勝の敬禮をなし、掌を合して至心を表明し
ながら佛に向ひ、世尊を觀世音菩薩を何の因
縁によつて觀世音と名づくるかと問うた、こ
の間に應じて佛は無盡意菩薩に告げるにの意
である。果林子のこの文は、觀音經を讀上げ
たことを記したまでである。

咒詛諸毒藥 忿彼觀音力、則還著於
本人(田村將軍)
普門品に出てゐる文である。咒詛或は毒藥を
以て害せられうとして身に危害が及ぶとき、彼
の觀世音の力を祈念すれば、害者還つて自ら
その咒詛に觸れ毒藥に苦しむに至るの意
しよ(すしつたが)

怨怒悉退散 大師木蔭に立寄り、衆
怨悉退散・急急如律令と繰返
し(曉天臺)
怨念を藏する衆多の敵悉く退散するとの意。
普門品に「念彼觀音力、衆怨悉退散。」

諸經中王最爲第一 此の經は諸經
中王最爲第一、法華一部の肝要は
全う首題に止まされり(大覺)

法師品に「我所説諸經、而於此經中、法華
最第一。」

諸法從本來常自寂滅相、十方佛土
中唯有一乘法無二亦無三(釋迦)
方便品に出てゐる文である。佛土は佛の住
める國土である。「乘」は運載の義、因人を載

せて麗果に運ぶ乘輿と云ふ意であつて、佛の
教道を云ふ。諸法は本來吾人の見るやうな差
別の相を有するものではない、其本體は寂滅
清淨にして常住不變のものである。十方佛土
中に於て唯一絕對の教道あるのみで、二もな
ければ三もない。

諸餘怨敵皆悉摧滅(大覺)
生王菩薩本物品に「汝今已能破諸魔賊、壞
生死軍、諸餘怨敵、皆悉摧滅、善男子、百千
諸佛、以三神通力、共守護汝。」

しんたつさいふくさう 深達罪福相
紫摩黄金の光明と(釋迦)
〔深達罪福相〕深達罪福の根源に達し、福
徳を具備して聖者たるを云ふ。提婆品に「深
達罪福相、徧照於十方。」

是人於佛道、決定無有疑(大覺)
神力品の偈文の最終の句であつて、法華經を
持する人は自ら成佛得道されるといふ決定心
を得るとの意。

そくげんふによしんぬせつぼふ 誠
にそくげんふによしんぬせつ
ぼふの濟度方便のあたり、老若
男女諸國順禮手を合しつづつ禮した
り(一心五戒現)

「即現婦女身而爲說法の」而の脱落したの
である。婦女身は觀世音三十三身の一であつ
て、自在に大法を演説し衆生を化導される爲
には、觀世音は婦女身に化現されるのであ
る。普門品に「應以長者居士童官婆羅門婦
女身得度者、即現婦女身而爲說法。」

世界の契を違へず阿羅邏仙人と現
じ來れり(釋迦) 大通智勝佛、十
劫坐道場、佛法不現前、不得成佛
道(釋迦)

梵名をMahāvīrajananāthaと云ひ
法華經の創造者である。この佛は十小劫の永
く閑道場に結跏趺坐して、身心不動であつて
佛法が吾前にあるやうに心中に現はれて來
らない。それで十小劫更にまた十小劫と絶え
ず修業の功を積んで遂に佛法を成就し、法華
經を講じて復入定すること八萬四千劫に及ん
だ。劫成世界の契とは、八萬四千劫のその
間入定されて、この世界に出現されることを
云うたのである。化城喻品に「大通智勝佛、
十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道、
……過十小劫已、乃得成佛道……彼佛
說經已、靜室入禪定、一心一處坐、八萬四
千劫……」

*だいはぼん 女人成佛の提婆品高
らかに遊ばし(冷泉節)
〔提婆品〕提婆達多品を云ふ。其文中に「當時
衆賢、皆見諸女忽然之間變成男子、具善薩
行、即往南方無垢世界、坐寶蓮華、成三等正
覺、三十二相八十種好、普爲十方一切衆生
演說妙法」とあつて八歳の龍女も成佛した
ことが説いてゐる。

提婆品に法華修行の輩に以上五つ
の功力を擧げ給ふ(大覺)

「二つには三惡道に墮さず云ふ」を見よ。

たいびやくごしや 大白牛車に打乗
りて、今身より佛身に至るま

で(一心五戒魂) 車の兩輪兩角の、
大白牛車の力足(加増實我) 網代の
與より乗物より、大白牛車こそ乗
りよけれ(吉岡染)

「大白牛車」變哈品に説ける三車の一であつて、白牛の牽く大車である。法華の妙法を車に譬へて大白牛車といふ。變哈品に「爾時長者、各賜諸子等一大車、其車高廣、衆寶莊校、周而欄飾、四面懸鈴、又於其上、張設幢蓋、亦以珍奇雜寶、而嚴飾之、寶璣交絡、垂諸華縷、重敷錦筵、安置龍舟枕、覆以白牛、廣色充潔、形體殊好、有大筋力、行步平正、其疾如風、云云。

たうしんだんだんえ 爰に神木の
大銀杏に怪しき鳥の羽を休め、刀尋
段段壞とて囀りける(圭馬判官盛久)

たうまぢく 賊兵數多討取れども
稻麻竹葦と取圍み(唐船廳)

された。されは「谷の水峯の薪の道」とは佛道修行の意に云ふ、さくわきふすゐるを見よ。ちやうじやくうし 今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、長者くうしの譬として世に有難き御經なり(五人兄弟)

ついでしやうこうしはう
「ついでしやうこうしはう」を見よ。

頭破作七分、如阿梨樹枝(大覺)

づもくずぬなう 金銀珠玉は今生一世の寶、却つて人を迷はず地獄の導とはこの事、されば經には頭目

髓腦と説き(并簡)

「頭目髓腦」髓は骨中の脂である。「腦」は頭髓である。佛は無上菩提を求めようとして、頭目髓腦その他捨捨する所がなかつた。提婆達多品に「爾時佛告諸菩薩及天人四衆、吾於過去無量劫中、求法華經、無有懈倦、於多劫中、常作國王、發願求於無上菩提、心不退轉、爲欲滿足六波羅密、勤行布施、心無少怯、積集財七珍、國土妻子、奴婢僕從、頭目髓腦、身肉手足、不惜軀命、時世人民壽命無量、爲於法故、捐捨國位、委政太子、擊鼓宣令四方、求法、誰能爲我說大乘者、吾當終身供給走使、云云。

つるしやうこうしはう 釋尊前生の鐘を鳴して大法を得給ふによつて、つるしやうこうしはうと御經にも説かれたり(用明天皇)

とらうほう 第一の巻序品より一

心不亂に讀誦あり、第三等雨法雨の文に至り給ふ時(大覺)

「等雨法雨」變哈品に「正見邪見、利根鈍根、等雨法雨、而無懈倦」

＊なむいろれい 南無幽靈出離生死、一しやふとくさばんでん、二しや帝釋、三しや魔王、四者轉輪聖王、五者佛身、うんがによしん即身成佛(十二段) 南無いろれい、そくわうなんばうむくせかい、さほうれんげ、じやうとうしやうかく(兼好)

源氏十二段(源氏物語)のこの文は、提婆達多品に「南無幽靈出離生死、一者不得作梵天王、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身、云何女身速得成佛、とあるに據つたのである。「南無」は歸命・頂禮の義、自己の頭を下げて佛菩薩の足を禮拜するもので、情仰歸依の至極をあらはす最敬禮である。「幽靈」は亡靈である。人は皆三界に迷ひ、貪慾瞋恚愚癡の煩惱に驅られて、此に死し彼に生じ流轉して止む時がない。されど佛道を修めて迷妄を轉じ悟を開くを得ば、則ち生死を超越してその苦輪を脱することを得る、これを「出離生死」といふ。女人は罪業深き身なれば五障を有す、即ち一には梵天となるを得ず、二には帝釋となるを得ず、三には魔王となるを得ず、四には轉輪聖王となるを得ず、五には佛

身となるを得ず、何んぞ五障の女が速に成佛を得ようやの意。

兼好法師物見車のこの文は、提婆達多品に、「龍女忿然之間變三成男子、具善諸行、即往南方無垢世界、坐寶蓮華、成正覺」とあるに據つたのである。南方無垢世界に往き、寶蓮華上に坐し、成佛し給へるの意。「無垢世界」は沙羯羅龍王の女なる八歳の龍女が男子と變じて成佛したる世界を云ふ。「正覺」とは、妄を斷盡し歸眞寂靜なる妙覺の佛果を證するを云ふ。

南無釋迦牟尼佛、南無阿彌陀佛、願以此功德、普及於一切、我等與衆生、願皆共成佛道(唐船願)

古院本(山水九兵衛版、七行本)には傍訓の通りの假名で書いてあるのを、漢字を以て記した。この假名文はこの漢文の北京音に酷似してゐるから、果林子は未熟ながらも唐音をも知つてゐた其の該博な智識に驚嘆せざるを得ない。「願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆共成佛道」は、果林子の文には「ん」(願)が増加してゐる)は、化城喻品の偈文中の文で、梵天王が佛を供養し、その功德を一切衆生に廻旋するを願ふ文であつて、佛教各宗で法事の終に必らず之を唱へ、廻向といふ(念佛宗の廻向文は五六二頁を見よ)。

入於大海假使黑風吹其船動難墮羅刹鬼國其中若有乃至一人稱觀世音(伊豆日記)

普通品(觀音經)にある文である。若し諸の衆生が七寶珍器を求めようとして大海に入る時、一天かき曇り業風吹いて、その乗れる船

妨は悪魔鬼神の國に吹寄せられ、運れがたき場合にもその中に唯一人にて觀世音の御名を稱へる者あらば、同行の諸人は皆この大難を離脱せん」と説いてある經文の一節。

如却關開大城門 寶塔にさし向ひ、如却關開大城門と唱へさせ給ふ時、扉はつと開け如來の尊影儼然たり(天覺)

「却は御の慈母であつて除の義」「開關は門のくわんぬきとちやうのことに門のしまりをいふ。開關を却けて大城門を開くが如し、見覺塔品に、「釋迦牟尼佛以右指開七寶塔戶、出大菩薩、如却關開大城門」と。

如劫闍闍云云 「劫は劫の誤。「にやかくけんやく云云」を見よ。

によせそんちよくたうぐぶぎやうの誓 如世尊ちよくたうぐぶぎやうの誓は過たす、口頃信じ奉る超八醒翻の法華經力(五人兄弟)

「如世尊勸當具奉行世尊の勸の如くに當に當にに教命を奉承し行持すとの意。囉栗品に、「時諸菩薩摩訶薩、聞佛作是說、已皆大歡喜、遍滿其身、益加恭敬、曲躬低頭、合掌向佛、俱誠大聲言、如世尊勸當具奉行云云。」

によととくせん 弘法の爲入唐の大望あり、げに御經にもによとくせん、偏に頼むとありけれ(以呂波)

「如渡得船衆生が佛に逢うて濟度されるを、渡しに船を得たのに喩へたのである。藥王品

に、「如子得母、如渡得船、如病得醫、如闇得燈」。

*ねびくわんおん 同音にねび觀音 大慈大悲と合掌し(西王母)

「ねんひくわんおん(念彼觀音)の約。彼の觀世音の神力を心念すればの意。「念彼觀音力」の文句は普通品の中に多く見えてゐる。従つてこゝも觀音經(即ち普通品)を念誦したのである。ねんひくわんおんりき云々」をも見よ。

ねんひくわんおんりき、りやくこふふしぎ 念彼觀音力、歷劫不思議の御縁なり(兼好)

「念彼觀音力、歷劫不思議」念彼觀音力とは彼の觀世音の神力を心念すればの意。歷劫不思議とは思議すべからざる長大の時間をいふ。以上の二句共に普通品にある文句である。この文は不思議といふことを言はんが爲に、觀音經の文句をかりたまでで別に經文の意義によつたものではない。

方便の偏は罪にあらずと、佛さへも虚妄の御法を説き給ふ(酒吞童子)

方は方法、便は便宜の義、佛權智を以て善巧工夫して、下根の衆生を眞實に入らしめてだてて方便といふ。法華經假名新注抄、方便品に、「常に人の思ふは、權方便とて偽をいふを方便とこころ」と見え、譯にも「うそも方便」といへば、果林子これらに據つてかくいうたのである。

*はちじふしゆかう あ御姿がすぐに佛の三十二相、八十種好も外にない、ああ御殊勝や有難や

と(并筒) 出山の釋迦牟尼佛、四八の相好・八十種好(釋迦)

「八十種好」圓滿微妙八十種の形相をいひ、釋尊の妙好である。提婆達多品に、「微妙淨法身、具相三十二、以八十種好、用莊嚴法身」とある。

八歳の龍女南方無垢の成道(天總冠) 沙羯羅龍王の女八歳にして佛道を成就し、忽ち男子に變成して南方無垢世界に成佛したといふ。提婆達多品に、「有婆娑羅龍王女、年始八歳、當時衆會皆、見龍女忿然之間變三成男子、具善諸行、即往南方無垢世界、坐寶蓮華、成正覺、三十二相八十種好、普爲十方一切衆生、演說妙法」と。

ひくしよせん。ひしんしよそく の玉は本佛の悟り、甚深秘密の一大事、非口所宜非心所測とて、口にも説かれず心にも測られず(大總冠)

「非口所宜非心所測」提婆達多品にある文である。口に宣へ盡されず、心に測り盡されぬの意。「もんじゆ云云」の條を見よ。

一つには三惡道に墮ちず、二つには十方の佛前に生れ、三つには所生の處に常に此經を聞き、四つには若し人天の中に生れて勝妙の樂を受け、五つには佛前に在つては蓮華より化生せん(天覺)

提婆品に、「聞妙法華經提婆達多品、淨心信敬不生疑惑者、不墮地獄餓鬼畜生、生三十三佛前、所生之處常聞此經、若生人天中、受三勝妙樂、若在佛前、蓮華化生」と。

受三勝妙樂、若在佛前、蓮華化生」と。

平等大惠眞淨大妙法(大覺)

法華經を翻讀した語である。見覚塔品に「爾時寶塔中、出大音聲、默言、善哉善哉、釋迦牟尼世尊、能以平等大惠、教善辦法、佛所護念、妙法華經、爲大衆之說、如是如是、釋迦牟尼世尊如所說者、皆是眞實」と見え、如來神力品に、「爾時千世界微塵等菩薩摩訶薩、從地涌出者、皆於佛前、一心合掌、瞻仰尊顏、而白佛言、世尊、……我等亦自欲得是眞淨大法、受持讀誦解說書寫而供養之」と見え、

ふくじゆかいむりやう 日本住吉大明神福聚海無量と、丹青無二の志(國性鑑)

〔福聚海無量〕福を聚集すること恰も海の無量なる如くであるの意、觀世音の功徳を讃歎した言葉である、それを用いたのである。普門品に、「具一切功徳、慈眼視衆生、福聚海量、是故應頂禮」。

ふくてんしゆくじきとくほん(井筒) 〔福田宿殖徳本〕福田に徳の根本を植ゑ置くの意、普門品に、「設欲求女、便生端正有相之女、宿殖徳本、衆人愛敬」。

*佛種は縁より生ずとかや(徳) 佛果を生じる種子は縁より起生するところ、方便品に、「佛種從縁起、是故説一乘」、太平記、卷二十九、藥師寺通世の條に、「佛種は縁より起ることなれば」。

ほうゐとくじやうわうぶつのみくに 守本尊普賢陸唾、ほうゐとくじやう佛の御國を出て六牙の白象に鞭打

つて(五人兄弟)

〔寶威徳土王佛國〕普賢菩薩の居給ふ國土である。普賢菩薩品に、「白佛言、世尊我於寶威徳土王佛國、遙聞此娑婆世界説法華經、與無量無邊百千萬億諸菩薩衆、共來聽受」。

まごら 普門品の天龍八部、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅、其外南海上界の龍神(會釋出)

御佛も衆生の爲の親なれば(會根輪) 譬喩品に釋尊の詞に、「今此三界皆是我有、其中衆生悉是我子」。

無盡意菩薩無量百千萬億 娘では無盡意菩薩、無量百千萬億に思ひ砕く夫婦の歎き(蚌合賦)

むにむさん 中道實相の車は無二無三のかどに轟き(百日曾我)

めうしやうごん 一子出家の功力によつてめうしやうごんの悟を得(百日曾我) 名もいとましき舞樂

のの前、めうしやうごんの跡追ひて 母も勸むる法の道(吉岡榮)

妙法の經力にて即身成佛(大覺) 提婆達多品に、「佛告諸比丘、未來世中、若有善男子善女人、聞妙法華經提婆達多品一淨心信敬不生疑惑者、不墮地獄餓鬼畜生、生三千万佛前、云云」とありて、龍女の妙法の經力にて即身成佛してゐる。

妙法蓮華經 妙法蓮華經、觀世音菩薩普門品第二十五(出世景清) 妙法蓮華經、觀世音菩薩普門品第二十五、爾時無盡意菩薩即從座起、偏袒右肩合掌向佛而作是言、世尊觀世音菩薩以何因緣、名觀世音菩薩(堀川波鼓(兼好))

大乗經典の一で、鳩摩羅什の漢譯本最も行はれ、八卷二十八品ある。普門品即ち觀音經はその第二十五品に當る。ここに見えてゐる文は觀音經の冒頭の文である。加増曾我に「南無平等大覺妙法華中の諸天善神」とある。

文珠菩薩、釋尊の御法を受け、龍宮の魚鱗を濟度し給へども(大藏冠)

らごゐちやうし 然るに教主釋尊も羅睺あちやうしと説き給へり、石の火の光の間をだにもなどやそひもせぬ(虎が窟)

*りやくこふしき 忽ち光明赫奕として千手觀音の御首と變じ給ひける、歷劫不思議ぞ有難し(出世景清) 忍辱慈悲の觀世音、歷劫不思議の尊容(蚌合賦)

提婆達多品第十二に、「如稱菩薩聞文殊師利、仁在龍宮所化衆生其數幾何、文殊師利言、其數無量不可稱計、非口所宣、非心所測、且待須臾、我自當證知、所言不竟無欺菩薩坐寶蓮華、從海涌出、詣靈鷲山、住於虛空」。

〔羅睺爲長子〕釋尊が悉達太子であつた時、羅睺を長子となされた。羅睺は即ち羅離(その條で釋尊の長子である。授學無學人記品に、「我爲太子時、羅睺爲長子、我今成佛道、受正法爲法子」、諸曲、百萬に「悉くも此御佛も羅睺爲長子」と説き給へば)。

〔歷劫不思議如何に久遠な時間を経るまで思量しても、微妙で更に思量することができなから〕の意で、妙法を頌する詞である。普門品に、「弘誓深如海、歷劫不思議、待多千億佛、發大清淨願」(果林子作、木領曾我古版入行本に「しよし如何なる懸願なりとも、歷劫修行つくべきかと」とありて、「歷劫修行」に「れきごうしゆきやう」と振假名を附けてある)。

龍奮蛇身の女人の身の南方無垢世

界に成道を遊ぐ(大意)
提婆達多品に、「龍女忽然之間變成男子、具善薩行、即在南方無垢世界、坐寶蓮華、成等正覺」。

*りゆうらによ 龍女も成佛する時は煩惱菩提となるぞ頼もし(重井簡)

〔龍女〕婆娑羅龍王の女が八歳で正覺を得て成佛したといふ。提婆達多品に、「有婆娑羅龍王女、年始八歳、智惠利根善知、衆生諸根行業……龍女忽然之間變成男子、具善薩行、即在南方無垢世界、坐寶蓮華、成等正覺」。誦曲・海士に、「八歳の龍女は南方無垢世界に

生を受くる。
*ろくしゆしんどう 時に六種震動して行くも来るも本地の娑婆(實古教信) 山鳴り谷應へ天地六種に震動して、大地も裂くる如くなり(津月三郎)

〔六種震動〕天地が動、涌、震、擊、吼、爆の六種に震動すること。序品に、「普佛世界六種震動」とありて科註に、「六種者調動・起踊・震・吼・覺六也」と見えたる。これは舊譯である。

摩耶經に據れるもの

釋尊は母の御爲切利天に昇り、一夏九旬摩耶報恩經を説き給ふ(大意)

釋尊・切利天(たうりてん)を見よに昇り一夏九旬(四月十六日より七月十五)の間母摩耶夫人の爲に法を説いて證果を得させられた。

その經を佛昇切利天爲母説法經と云ひ、摩訶摩耶經とも摩耶報恩經とも云ひ、齊の善景譯のもの二卷ある。

それ釋尊は母の御爲云云

〔釋尊は母の御爲切利天に昇り云云〕を見よ。月月の守神守佛ある故(胎内の子に於て)、その月に當る佛神の御怒り太刀取に當つて、或は惡病或は翻難

にかかり、怨ち命終ること周期を待たずといふ事、摩耶夫人經に説かれたり(總)

此の出所摩耶夫人經にこの體に出ない。
*屋所におもむく羊(吉野忠信) 屋所の羊の歩みより、先に近付く人の世と願みざるぞ厭なる(國性爺後日合體)

〔羊の歩み〕を見よ。
*羊の歩 既に時刻も午の刻、未の歩近付きて(善聲太平記) 今日ば最期の羊の歩、足に任せて(膏庚申)

摩耶經の爲に、譬如(譬)府陀羅(屠者)の驅羊就(屠)所、歩歩近(死)地、人命亦如是、とある

より出た故事で、人命の時時刻刻死に近づくに譬ふ。
一足つづに消えて行く(曾根崎)

無量壽經に據れるもの

あしなじゆ 尼連禪河のあしなじゆと、押分け振分け過ぎ給ふ(以呂波)

〔阿斯那河〕尼連禪河の岸に生ずる樹の名。佛説無量壽經卷上に、「沐浴金流、天按樹枝、得(華)出池」とありて、釋跋諦撰の佛説無量壽經科解・卷第二に註して、「池邊有樹、名阿斯那、樹神按枝身低、善薩華枝、得(華)出池岸」と見えたる。「にれんぜんが」をも見よ。

うかんろほふうみんしゆじやうこ この水は極樂の八功德池の水と思ひ、うかんろほふうみんしゆじやうこときく時は、これを飲んで心身を潤し(夕露)

〔雨甘露法雨慈衆生故〕「みん」(慈)は潤の誤か。大空より降る甘露の雨の遍く萬物を潤すが如く、佛の教法は衆生に大慈悲化益を與へ給ふ。無量壽經下に、「猶如大雨、雨甘露法、潤衆生故」。

ひやくくみ 十萬億土馬次なしの西に百味の旅籠屋に、觀音勢至手を取りて(丹波興作)

歩歩死地に近づくの意譯である。摩訶摩耶經の爲に、譬如(譬)府陀羅(屠者)の驅羊就(屠)所、歩歩近(死)地、人命亦如是、とある

〔百味〕許多の好味。百は大數を示したもので許多の意。無量壽經卷上に「如是是諸佛隨意而至、百味飲食自然盈滿」。近松のこの文に「十萬億土」といふ西は「しちへる」は、淨土極樂は西方十萬億土の彼方にあるとの佛説に據つたのである。

ふしゆしやうがく 欲生我國の提灯に不取正覺の興を照して(實古教信)

〔不取正覺〕彌陀の誓詞である。大無量壽經に彌陀の四十八誓願を擧げ、各誓願にいづれも「不取正覺」の誓詞が記してある。阿彌陀佛の誓願に成就しないならば正覺の果位に入らなぞとの誓願は、衆生の爲にむなしからず、この慈悲の誓願に乗じる者、悉く安穩寶國に到ることと乘物に喩へて、不取正覺の興と云うたのである。往生禮讚に、「若我成佛、十方衆生稱我名號下至十聲、若不(生)者不取正覺、彼佛今現在成佛、當知(本)誓願不虛、衆生稱念必得(往生)」。

よくしやうがこく 欲生我國の提灯に不取正覺の興を照して(實古教信)

〔欲生我國〕我國は阿彌陀佛の西方極樂淨土をいふ。十方の衆生が佛道に歸依して淨土

をいふ。十方の衆生が佛道に歸依して淨土

生れようと欲へといへる佛の誓願を信する者は、淨土に往生するを得るが故に、佛の誓願を無明の冥闇を照す提灯に喩へて、欲生我國の提灯といふたのである。「欲生我國」は佛説無量壽經に阿彌陀佛の四十八誓願を明す中の第十八、十九、二十の願文に見えてゐる。即ち「設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯

除五逆、誹謗正法。設我得佛、十方衆生、發菩提心、修諸功德、至心發願、欲生我國、臨壽終時、假令不與大衆圍繞、現前其人前者、不取正覺、設我得佛、十方衆生、聞我名號、係念我國、植諸德本、至心迴向、欲生我國、不三果遂者、不取正覺」とある。

往生要集に據れるもの

阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸聖經、一念無量劫即滅無量罪(三世相)

この文は往生要集に見えてゐる。阿字には十方三世の諸佛を包含し、彌字には一切の諸菩薩を包含し、陀字には八萬の諸聖經典を包含す。即ち阿彌陀の三字には萬善萬行の一切の功德利益を悉く包含するが故に、心を散亂せずして専心に阿彌陀を念すれば、無量劫の功

徳を得て、無量の罪業を即滅す。

上求菩提・下化衆生 一聲の松の

風、池水に映る月影も、上求菩提下化衆生、皆觀念の便りぞと(釋迦)上は眞如の理を證悟する聖智を求め、下は一切の衆生を濟度攝化するを云ふ。往生要集に、「總論之願作佛心、亦名上求菩提下化衆生心」。

雜(其の他の諸書)

あつきにふごしん(佛田川)

「惡鬼入其心」極魔の魅入るをいふ。維摩經註に「十頭羅刹入二王體」などに見えてゐる。

勇心の生駒山(文武五人男)

勇む心の駒を生駒山にかけたのである。安樂集に「諸凡夫、心如野馬、識劇猿猴、馳騁

六塵、何曾停息」

いせといへる文字をば父母と讀ませ

て、金胎兩部に表したり(以呂波)

「いせ」の「い」の字は相對する二點であるが、其一點を父とし、一點を母とし、また之を金胎界曼荼羅・胎藏界曼荼羅の兩部によせてかく云うたのである。以呂波物語のこの後の文に「先づいひの字の二點をば父母過去未來にも喩へたり、又は日月金胎兩部の大日如來、其外一字一點にも皆佛體を表はすとかや」と、あるによりて意旨ら明である。「いせ」の「せ」は世の義に取つたのである。

一文文是真佛 げにや一文文でしんぶつと聞くときは、一字の文字も佛の尊容なるものな(賀古教信)

月支の遺韻が法華經の外題六十四字を書く間に、其字六十四體の佛となつたと云ふ故事によつたのである。「月支の遺韻」を見よ。

一念の佛性三世十方に通達し(大總冠)

有情非情のもの皆佛陀たるべき種性即ち佛性を具有するもの、佛教を聽かぬ時はこの佛性の存在を知ることができぬ。故に佛教を聽いて一心に佛果を求めようと發起して自己の佛性を自覺す。この佛性は眞如なるが故に三世を貫き十方に渉るよりいふ。

一心頂禮萬德圓滿釋迦如來信心舍利(萬年草)

世尊舍利體の咒中に出てゐる。謠曲・舍利には、「一心頂禮萬德圓滿釋迦如來」「萬德圓滿」はの條を見よ。

五つの塵六つの欲 人間五つの塵六

つの欲、しばし心は濁り江に、沈みて死すべき身なりしを(西王母)「ごぢんろくよく(五塵六欲)を見よ。

いろはにほへどちりぬるを、わがよたれぞつねならむ、うゐのおくやまけふこえて、あさきゆめみしゑひもせず(以呂波)

いろは歌は弘法大師の作と傳へ、舊説いろはの讀歌の詞に涅槃經の四句を當て、即ち色業離斷散去留還(諸行無常之義)、我世誰曾將常(是生滅法之義)、有爲乃真山今日起(天生成滅已之義)、淺夢不見醒不爲(寂滅爲樂之義)であるとしてゐる。

有緣無緣乃至法界平等(天綱島)

佛を信じて佛と信者と緣ある者、或は信じなからず緣なき者、乃至宇宙萬有一切衆生が佛菩薩の平等の利益を享受するの意、淨土宗別廻向文「三界萬靈、六道衆生、有緣無緣、乃至法界、平等利益」の中の文句であつて、廻向の終にこの文を唱へ、十念を唱へ、念佛を唱へて廻向を終るによつて、この別廻向を「切廻向」(その條を見よ)とす。

うんたらたかんまん うんたらたかん何しに罰が當らうぞ(一心五戒魂)

「昨恐怖追難託(此阿彌陀種子)」不動明王咒中の文句である。

えさうふほくのたましひ 袈裟御前さうごこと行みて、ナウ爲若、御身年頃我を慕ひ、これまで来る愛着に、えさうふほくの精靈の假に

「善悪」五臓はその條を見よ。捺女善城因縁經に「逢一小兒獲樵、善城認視、悉見此兒有藥王樹、從外照內、見入眼、此兒樵中得無有善王耶」とあるに據つたのである。

***きふきふによりつりやう 鈴錫杖**
たちりりながら、急急如律令と責めかゝる(女殺)

「急急如律令」去つて滯ふるを得ざる義であると云ふ。もと道教で用いたもので事文類聚にも見えてゐる。我國でも古くは長秋記、大治五年五月五日の條に見えてゐる。重伴類に用ひられ、修驗者僧侶等が咒文の後に唱へる詞であつたが、常人も咒語に用ひるやうになつた。大元帥儀軌・加持鬼病法に「不須二人語、行者但急急念文」。寶眼錄に「符祝之類末句急急如律令者、以爲如飲酒之律令、速去不得滯也云云」。眞俗佛事編一に「此火災を伏し、病を癒しむる咒術語なり」。

くわきやうさんまい
龍宮の紫金を取つて、世尊火きやうさんまいの踏繻を以て鑄たて給ひし鐘の聲(用明天皇)

「火坑三昧」火坑の中に禪定に入ること。本行集經・四十に「如來爾時亦入如是火坑三昧、身出大火」。

***げきふさんづきかつほうまん**
れぞ出家の役と觀じ、器物に水を入れ、げきふさんづきかつほうまん南無阿彌陀佛と差出し(釋九)

「下給三途、飢渴渴澆」施食作法にて唱へる四句偈中の二句である。「じやうこんさんぽうちゆうぶしおん云云」を見よ。

華嚴經にて中戸に口説き、阿含經にて紫見初め、方等經にて吾妻を掴み、大般若にて三橋になづみ、法華經を以て高尾にのぼり、南無阿彌陀佛と申すなり(扇八景)

天台宗では釋尊一代の説教を五時に分ち、淺きより深きに漸次に誘導されたのだとしてゐる。即ち第一・華嚴時には華嚴經の如き佛自證の境界を説き、第二・阿含時には阿含經の如き小乘を説き、第三・方等時には維摩經・楞伽經の如きを説き、第四・般若時には般若經の如き衆生執着心の打破を説き、第五・法華時には法華經を説きて、一切衆生悉皆成佛の本意を了せしめられたものとしてゐる。眞林子はこれを南無阿彌陀佛に配して、百日曾杖三部經の條に「それ六字の名稱といはば、華嚴經にて南の字をあらはし、阿含經にて無の字を攝し、方等經にて阿の字をひらき、大般若にて彌の字をつづめ、法華經を以て陀の字を皆會し、南無阿彌陀佛と申すなり」とも書いてゐる。この文は遊客と遊女との馴染合ふ關係をきかされたのである。即ち「中戸に口説き」は中戸の密會を意味し、「なかと」の條を見、「紫」はゆかりを意味し、「むらさき」の條を見、「吾妻」は吾が妻とするを意味し、「み橋になづみ」は、三橋を懸橋する情にひかれて其の縁にかかづらふ意(橋を縁の橋渡りにきかされたのである)。「高尾」にのぼり「高尾山」に登るを、精神その女にのぼりつめる意に

いうたのである。「中戸」「紫」「吾妻」「三橋」「高尾」の各語の上部の一音を取つて綴合せれば「なむあみたなる。故に南無阿彌陀佛と申すなり」と云うたのである。然も「紫」「吾妻」「三橋」「高尾」は元祿頃大阪新町にいた遊女の源氏名であつて、この名悉く好色聖聖鹿子(元祿七年刊及び加増曾我第二段・新町天神づくしの條に見えてゐる。まても眞林子自由の筆かな。

げきふさんせつ 今示す所の妙法は諸教中王の御法にて功一期に高く化度三説にすぐれたれば餘經の及ぶ所にあらず(大覺)

「化度三説化度」とは衆生を教化濟度することである。法華初心成佛妙(縮刷)日蓮聖人御遺文・一六七三頁に「已今當の三説の中に、佛になる道は法華經に及ぶ經なしと云ふ事は正しき佛の金言なり」と見え、持妙法華問答鈔(縮刷)日蓮聖人御遺文・四六八頁にも「唯法華經計こそ最後の極説なるが故に、已今當の中に此經獨り勝れたりと説かれて候へ」と見えてゐる。

***ごきやく** 出家に棒をあてたらば五逆罪(大經師) 佛身より血を出すは五逆罪の惡僧よ(實古教僧) 親殺しは五逆の第一、五天竺の王位に立つべきか(釋迦)

「五逆」佛教で説ける五つの大逆罪、即ち殺父、殺母、害阿羅漢、破和合僧、出佛身血にして、この罪を犯す者は必ず無間地獄に墮ちると云ふ、よつて五無間業とも云ふ。法華綱目には、殺父母、破和合僧、出佛身

血、殺阿羅漢、破羯磨僧と見えてゐる。五穀を棄てたる罪業は五逆にまさる(天智天皇)

近松は釋迦文佛(釋尊)の説かれた詞とらうてみれば、佛經に見當らない。思ふに未を善薩ともいへば「よね」の條を見よ、佛善薩を五穀にとりなしてかくいうたのであらう。

こしきげんらいけうわうきやう 名虎が魂魄呼子鳥、鳴くを知るべに招魂の法、去讖還來教主王經、歸り來れ歸り來れ(井筒)

「去讖還來教主王經」去讖還來は死者の魂魄を呼返す、即ち招魂の義、教主王經は佛教の經典の名である。眞言宗には呼子鳥の鳴く時、去讖還來教主王經を唱へて印相を結び、招魂の秘法を終る。谷響集第九に「招魂名本出儒書、經名去讖還來……教主王經第十四、名去讖還來、並説印眞言、今略而不出之」。徒然草第二十段に「ある眞言書の中に、よぶこ鳥鳴く時招魂の法を行ふ次第あり、云云」。

***ごや** やや更け渡る野寺の夜夜、八聲の鶏も鳴かはず(卯月調色) こやの鐘生滅滅と響き來る、果は寂滅爲樂ぞと(大經師)

「夜夜」の刻即ち午前四時頃をいふ。「野寺の夜夜」とあるは野寺の夜夜の鐘といふを略したのである。「夜夜の鐘」は夜明け方の勤

行、即ち晨朝の鐘の響をいふ。晝夜の梵鐘の音は諸行無常を生滅法・生滅經に「寂滅爲樂の四句偈に響く」といふ。祇園經に「鐘即自鳴、音中亦説諸行無常乃至寂滅爲樂」。諸曲・三井寺に、「後夜の鐘を撞く時は生滅法と響くなり、晨朝の響は生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響きて」ともいふ。

今身より佛身に至るまで能く保ち奉る、南無妙法蓮華經(重井簡)

日蓮宗信者が受戒の時に唱へる重き詞であつて、現身より佛身に至るまで常に能く戒を保持し奉るとの意。これに唱題目を續け戒である。もと日蓮大師が其兩親及び信者に戒を授ける時か唱へたるに始まる。いろは日蓮記にも「日蓮歡喜微笑あり、此御經をたもつ者は、其中衆生悉是吾子として佛の御子と説かれたり、今身より佛身に至るまで能く能く、かもち奉れと、御經をもつて頭を撫で給へば各一度に聲を上げ、南無妙法蓮華經と唱ふる聲暫しは鳴りしづまらず」と見えたる。

妻子珍寶不隨者(天綱島) 妻子珍寶及王位臨命終時不隨者(輝丸(女護島))

(一)心五戒疏
妻子も珍寶も王位も命終に臨んではどうにもならず、身に隨つて冥途に逝く者無しとの意。大衆經、偈頌に「妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者」。法然上人の登山狀に「屍は終に苔の下に埋れ、屍は獨旅の空に迷ふ、妻子眷族は家にあれどもともなはず、七珍萬寶は滅に満てれども益もなし」。

三歸ばかりたもちし大魚の難を遁れたり(大覺)

歸依佛、歸依法、歸依僧を三歸といふ。西客等海中に入つて寶を探れる際、摩訶羅魚王(鯨)の口を開けるを見て、皆南無佛と唱へたので、苦厄を脱することができた、と云ふことが譬喩經にも見えてゐる。

しきしんのたうたいかいぜあみだぶつ 五蘊離散して梅檀の烟に伴ふ、しきしんの當體かいぜ阿彌陀佛と示し給へば(真古教信)

「色身當體皆是阿彌陀佛」色身は因緣所生の身を云ふ。衆生の心識を離れて別に阿彌陀佛なく、佛といふも畢竟心識の所變である。されば衆生の當體皆これ阿彌陀佛に外なぬとの意。なほこのことに就いては「心外無別法云云」ともいふ。

獅子身中の蟲 和御前がやうなる我慢愚痴の猿智恵を、獅子身中の蟲に譬へて佛も戒め給ふぞや(出世景清)

返忠せし因果は目前、獅子身中の蟲おのれと滅す(用文意)
恩を受けながら其者に仇すること。仁王經に、「乃是住持護三寶者、轉更破三寶如獅子身中蟲自食三獅子、非外道也」。

しだいこつじき 中にも次第乞食とは長者をも親しみます貧者をも厭はず、次第次第門並を請うて通る法なれば(空常盤)
「次第乞食」兜陀の行法に十二種ありて、次第乞食は其第三種目に當る。佛説十二頭陀經に、「……三者頭陀比丘不著三於色、不輕衆生、

等心離慳、不擇貧富故受次第乞食法」。「十二」の頭陀を見よ。
*十萬億土 盤盤たる山路に薪を拾ひては十萬億土の月を攀む(卯月潤色)
彌陀の極樂土を云ふ。極樂淨土は娑婆世界を去ること十萬億土の西方にあるといふ。佛説阿彌陀經に「爾時佛告長老舍利弗、從是西方、過十萬億佛土、有世界、名曰極樂、其土有佛、號阿彌陀、今現在說法、舍利弗、彼土何故、名爲極樂、其國衆生、無有衆苦、但受諸樂、故名極樂」。

上宮太子は夢殿より唐船に法の道、それさへためし七日の夢(國性爺後日)

「夢殿は地名部につきて見よ。日本往生極樂記三に「太子上官太子即聖德太子」宮有別殿、號夢殿、一月三度沐浴而入、若別諸經疏、有涌者即入此殿、常有三人、至自東方、告以妙義、太子閉戸不出七日七夜、時人太覺」。

じやうこんさんぼうちゆうぶしおんげきふさんづきかつほうらまんあびらうんけん(以呂波)

「上厭三寶、中奉四恩、下給三塗、飢渴飽滿」は施食作法にて唱へる四句偈文であつて、作法集にも見えてゐる。上は三寶(佛法僧)に獻じ、中は四恩(天地國主父母衆生)に奉り、下は三塗(地獄餓鬼畜生)に給し、飢渴の者までも悉皆飽滿するとの意である。「阿尾難陀文」は胎藏界大日如來の眞言句である。

しやうじの二法は一心の妙用、じやうちうろしせつぽふ(釋迦)

「生死二法一心妙用、常住此說法」生死は迷界の苦報である、この二者互に相容れざるやうなれども、眞如實相の上よりみれば本來涅槃の悟を開くべき佛性を具するものである、この絕對實理を觀するは一心の妙用である、故に經文に「生死本來佛性」とも見えてゐる。釋尊はこの絕對實理を説き顯かす爲に、常住不斷の說法を續けられたといふのである。この文句は、日蓮の胎前彌三郎許御書の中に「法華の三つの法門、常住此說法のよるまひなり」と見えてゐる。

昔在靈山名法華、今在西方名阿彌陀、娑婆示現觀世音、三世の利益三年續き(女説)

「昔在靈山名法華、今在西方名彌陀、娑婆示現觀世音、三世利益同一體」とある四句の偈文であつて、南岳大師の念佛法生安心の偈文として天台宗僧侶間に傳へられてゐる。三世の利益「からその頭」(語三)年」にいひつづけたのである。偈文の意は、昔釋尊は靈鷲山にて法華經を説示し給ひ、今は西方極樂にありて阿彌陀と申して衆生を濟度し給ふ、觀世音菩薩は娑婆世界に示現して衆生に佛果を得させ給ふ、釋尊阿彌陀、觀世音の三尊はその名稱とを異れども、もと同一體であつて、遍世界に未來の三世にわたる衆生に利益を施し給ふと云ふのである。去去年云々を見よ。

娑婆往來八千度 娑婆往來八千度釋迦(卯月潤色)

娑婆往來八千度、それは上代、これは末世、其身は佛身、此身は凡夫(天智大覺)

娑婆往來八千度、それは上代、これは末世、其身は佛身、此身は凡夫(天智大覺)

釋尊は婆娑世界に過去久遠の昔から幾千度も
出世された、梵網經廣舍那佛説菩薩心地戒品
に、「昔釋尊今來此世界八千返、爲此婆
娑世界二坐、金剛華光王座。」

諸惡莫作 衆善奉行(釋迦)(大原問答)

七佛通誠偈即ち「諸惡莫作、衆善奉行、自淨
其意、是諸佛教」の中の二句である。諸惡莫
作は消極的に惡を制し、衆善奉行は積極的に
善を勤めたるもの。なほ委しくは正法眼藏諸
惡莫作の章に就いて見よ。

稱我名號下至十聲 稱我名號下至
十聲の其功德、端嚴美麗の御僧安
祥と出現あり(實古教信)

南無阿彌陀佛の名號を十聲唱へること。「下
至」とは選擇集に「上發二形、下至十聲一
聲」と見えてゐる。往生禮讚に「若我成佛、
十方衆生稱我名號下至十聲、若不生者不
取正覺、云云。」

しよろいじん しよろいじんの大阿
羅漢神通力を試さんと(酒香童子)

「諸漏已盡」の煩惱滅盡して眞智の果を得た
ること。金剛經注に「諸漏已盡、復無煩惱、
名阿羅漢。」

眞如常任・實相中道 雲井ばるけ
き高天が原にましますば、眞如常
住じつさうちゆうだうの御神體、
天の御中主の尊と申し奉り(天神記)

眞如は一切萬法の依るところの實體眞性にして、
永久不變な眞理を云ふ。萬有の實相は有
に非ず空に非ず、非有非空の中道である。天
の御中主の尊とあるは、古事記に見えて、開

闢の時高天原に生れたれた元始の神である。
じんばらははらひたやうん 眞言の
行者に力を添へ給へ、じんばらは
らはりたやうんと、責めかけ責め
かけ祈りければ(摩訶天書)

そだまにすだくわろあかだせつてい
ろ 博士も我身空恐しく、料紙四
枚の札に認め、蘇多末尼主多光阿
揭多設祇嚩と書き記し、これぞ祕
密の御守、御座の四方におし給は
ば雷の怖れ候はず(天神記)

「蘇多末尼主多光阿揭多設祇嚩四方の光
明電王の名である。室内の北方に蘇多末尼、
西方に主多光、東方に阿揭多、南方に設祇嚩
と書いた札を掲げる時は、雷電の怖れなく其
災が無いと云ふ。最勝王經、如意寶珠品に、
「世尊於大衆中、告阿維陀曰、汝等當知、
有陀羅尼、名如意寶珠、遠離一切災厄、亦
能離一切諸難、雷電、至於此東方、有光明電
王、名阿揭多、南方有光明電王、名設祇嚩、
西方有光明電王、名主多光、北方有光明電
王、名蘇多末尼、乃若於住處、書此四方電
王名者、於所住處、無雷電怖、亦無災厄
及諸煩惱。」

それ法華修行の肝心は信心を以て根
本とす(大覺)

成佛記に、「法華修行の第一には只信心を以
て本とす。」

それ六字の名號といつば

「華嚴經」に云云を見よ。
大聖人の御書に提婆が三逆も云
云(大覺)
「大聖人とは日蓮上人をいうたのである。提
婆が三逆云云を見よ。
提婆が三逆も羅羅羅が二百五十戒も
同じく佛に成る、嚴王の邪見も舍
利弗の正見も同じく授記を蒙れ
り、こころをもつて大惡をも敷くこ
となかれ、一乘を修業せば提婆が
跡を繼ぎなん、これ等は皆無一不
成佛の經文空しからざる故と遊ば
されて候(大覺)
「提婆は三逆罪(殺父、殺母、殺阿羅漢)を犯
した惡人で釋尊の法敵である。羅羅羅は釋
尊の嫡子であつて、その行の密なこと八萬四
千の衆徒中第一であつた。嚴王は即ち妙莊
嚴王のこと、外道婆羅門の法を信じて佛法
を信じなかつたが、夫人淨徳及び二子淨藏、
淨眼の謀によつて遂に佛法に歸依して菩薩の
果を得た。詳しくは法華經、妙莊嚴王本事品
を見よ。舍利弗のことは其條を見よ。授記
は法華經科註に、授記亦云受記、受決、受別、
授是與候、受是得候、記是記事、決是決定、
別是了別也」と見えてゐる。
阿佛房鈔(福白蓮聖人御遺文第一九五四
頁)に、「提婆が三逆も羅羅羅が二百五十戒も
同じく佛に成りぬ。妙莊嚴王の邪見も舍利弗
が正見も同じく授記を蒙らる。此即無一
不成佛のゆゑぞか。四十餘年の内の阿彌陀
經中には舍利弗が七日の百萬反大善根をとが

れしかども、未顯眞實ときらはれしかば、七
日湯をわかつて大海に投げたるが如し。韋提
希が觀經を讀みて無生忍を得しかども、正道
捨方便とすられしかば、法華經を信せずば
返て本の女人なり。大善を用ゆることなし。
法華經に眞はざればなにかせん。大體をも欺
くことなかれ、一乘を修業せば提婆が跡をも
つぎなん。此等皆無一不成佛の經文、空しか
らざるゆゑぞかし。」

寶の山に入る、この食物に眼くれ、
實の山に入りたりと、軍將雜兵我
先にと擗食け人事必定(國性論)

天台止觀に「往生徒死無可得、如入黃山
中空手而歸。」

*だんあくしゆせん 佛法護護のう
つばり、だんあくしゆせん人の四
足をつきかため(聖徳太子)

は佛因果を説いて斷惡修善の道あり(國性論)

つほくめんさいうけふくわ 頭北面
西右脇臥、御年八十一歳にて二月
十五日涅槃の雲に隠れ給ふ(釋迦)

「頭北面西右脇臥」頭を北方に、顔面を西方に
向けて臥し、右脇を牀席につけ、口と目を閉
ぢ、兩脚を揃ね、左手を身上に順へて舒ぶ。

「斷惡修善」惡業を斷除して善業を修し善道に
修入すること。大聖不動明王金輪秘法に、
「見我身者、發善提心、聞我名者、斷惡
修善。」

これ釋尊入涅槃の形である、よつて以て死者
に行ふ臥法である。書言考節用集に、「頭
北面西、如來涅槃牀坐也、見長阿含經」。

天に向つて唾吐す 人を害すと思へ
ども却つて我身を害する事、天に
向つて唾吐すと、四十二章經にて
説かれたり(最明寺説)

復漢彌迦摩羅經等譯、四十二章經に「惡人欲
害賢者、仰天而唾、唾不汚天、還汚
己面」。

とくしようどうじ 徳勝童子の土の
餅の果報めでたき百萬石の國中が
打明けて(賀古教僧)

「徳勝童子」徳勝童子が土をもつて餅を爲して
遊戯せる時、釋尊に逢うてこれを捧げたり益
によつて、後に花氏城に於て正法王と作り阿
恕伽と號したと云ふ故事によつたのである。

阿育王傳(卷第一)本施土緣に「爾時世尊與
阿難、在巷中、行見二小兒、一名徳勝、是上
族姓子、二名無勝、是次族姓子、弄土而戲
以土爲城、城中復作舍宅倉庫、以土爲鈔
著於倉中、此二小兒見佛三十二大人之相莊
嚴其身、故三金光彩、照城内外、皆作金色
無不光明、見已歡喜、徳勝於是拘舍中土
名爲鈔者、奉土世尊、無勝在傍合掌禮畢、
……佛言我若涅槃百年之後、此小兒者當作
轉輪聖王四分之一、於花氏城作正法王、
號阿恕伽」。

***飛んで火に入る夏の蟲(國性爺)**
法苑珠林に「如飛蟻見火投」。

によがとうむい 一乘一貫の妙法の

縁に引かれては如我等無異の佛と
なる(大覺)

「如我等無異」この文句は日妙聖人御書などに
も見え、我もと誓願を立てて、一切衆生をし
て我がやうに等しくして異ることなからしめ
ようとの意。

よにんちごくしのうだんぶつし
ゆ(松風)

「女人地獄使能斷佛種」女人は罪業深く、五障
ありて地獄の使である、能く佛性を斷絶させ
るのである。寶物集下巻に、「華嚴經にいはく
女人地獄使、能斷佛種子、外面似善薩、内心如
惡使、能斷佛種子、外面似善薩、内心如
羅刹」。

女人は地獄の使 能く佛の種を絶
つ(大覺)

寶物集下巻に、「華嚴經にいはく、女人地獄
使、能斷佛種子、外面似善薩、内心如
夜叉」。

***よむげんはうやう** 總じて夢は
きものにてあり(今川了俊)

「如夢幻泡影、夢幻泡影の如くにはかきまき
金剛般若經に「一切有爲法、如夢幻泡影、如
露如電、應作如是觀」。

はりたやうん 突込む切先の膽に當
れば反返り、はりたやうんと割り
通す(萬年草)

眞言咒の靈明(阿闍梨)「おんあぼきやべい云
云」を見に、「腹痛やうん」をいひかけたの
である。高野山に藏ある眞言咒を用ひて文飾
としたのである。

百丈野狐の話 禪の百丈野狐の話
も寓言虚妄の戲論なり(本領曾我)

百丈禪師は唐代福州長樂の人である、諱
海、性は王氏、江西省洪州新吳の界なる大雄
山に住んだ、その山嚴峻峻嶺で千尺許なるに
よつて百丈山といふ。百丈禪師が説法する毎
に一老人衆に従つて法話を聽く、一日衆退
去すれども老人獨り退去しないので、師と問答
して大悟し拜して言ふやう、某日に野狐心を
脱す、山後に住をせん、敢て乞ふ亡僧の淨送
に依られんことをと、師 維那に命じて大衆
を集め、山後の巖下に至り杖を以て一死狐を
挑げ出し、法の如く火葬したといふ。

辨財天の寶にも十五童子の子寶は佛
も愛し給ふぞや(本領曾我)

辨財天女には十五童子が附隨してゐる。元亨
辨財第十八に、「天女 辨財 率十五童子
降臨」。

變成男子の願を立て、女人成佛誓
ひたり(女教)

親鸞上人の淨土和讃中の文である。女人には
五障あつて成佛するを得ないが故に、女人が
成佛するには性を變じて男子とならばなら
ぬ。變成男子の願は即ち女人成佛を祈る願で
ある。大無量壽經に、「設我得佛、十方無量
不可思議諸佛世界、其有三女人、聞我名字、
歡喜信樂發善心、厭惡女身、誓終之後、
復爲女像者、不取正覺」諸女を見よ。

ほうこうだいらし 寶公大士といふ智
者は鷹の巢より生れ出で(百合舎)

「寶公大士」寶誥大士を云ひ、南宋崇寧時代
にみた繪で、鷹の巢から生れ出たといふ。佛
祖通載第九に、「寶誥大士、於是年二、給三年
皇興元年、往來皖山縣本之水、髮而徒跣、著三
錦袍、俗呼爲誥公、面方而聲如鐘、手足
皆烏爪、初金陵陳陽民朱氏之婦、上巳日聞兒
啼、驚巢中、佛樹得之、舉以爲子、七歲依
鍾山大門僧檢出家、慕僧禮觀」。

まんといくゑんまん 一心頂禮萬德圓
滿釋迦如來(萬年草)

「萬德圓滿」功德無量無邊で缺損する所なきを
いふ。「一心頂禮」云云を見よ。

萬法唯心、心外無別法(根元曾我)

萬法は總て各自の心から作り出すもので、心
を離れて他の諸法の存在するものでない。心
外無別法、即ち成佛を見よ。

彌陀十劫に正覺を唱へ、始めて三界
の衆生を助け誘ひし(聖徳太子)

佛説阿彌陀經に「阿彌陀佛、成佛已來於今十
劫、……若有善男子善女人、聞説阿彌陀
佛、執三持名號、若一日、若二日、若三日、若
四日、若五日、若六日、若七日、一心不亂、其
人臨命終時、阿彌陀佛與諸聖衆、現在其
前、是人終時、心不顛倒、即得往生阿彌陀
佛淨妙國土」。

***水の月取る猿** 水の月取る猿澤の
池に身を投げ(智天慧)

取る猿猴は及ばぬ事の譬なが

ら(隅田川)

歌多の狼が手尾相懸いで井戸の中の月影を取らうとして皆溺死したといふ故事で、以て及ばぬ事に喩ふ。僧祇律に、「佛告諸比丘、過去世時波羅奈城有五百彌勒、見樹下有井、井中見月、共執一樹枝、手尾相接、入井并取之、枝折一齊死。」水の月取る彌勒は「水の月取る彌」に「狼瀧の池」その條を見よをいひかけたのである。

*みろく 釋迦は去り彌勒は未だ世に出でず(釋尊歌) 高野山は即身即佛の靈場、彌勒出世の值遇とかや(慈母天童甘露) それ我山に卒塔婆一本残せし人は、五十六億七千萬歳の後彌勒の出世に逢はせ給はんと御誓願(心中萬年)

〔彌勒〕梵名 Maitreya と云ふ。この菩薩は兜率の内院に居給ひ、釋尊の入滅後五十六億七千萬年にして娑婆に出現し、入天を化登し給ふといふ。釋尊入滅後より彌勒菩薩降下生の曉までを中間有爲となす。善勝處胎經二に、「彌勒當知、汝復受記、五十六億七千萬歲於此樹王下、成無上正覺。」

鞭の影に驚く馬、皮を打たれて驚く馬、肉を打たれ、骨を打たれ始め驚く馬あり(釋迦)

無常に驚くに差別あるを四種の馬に喩へたるのであら。釋了慧撰、往生捨因私記卷之四に、「弘決二引雜阿含云、佛告比丘、有四種馬、一善見鞭影二即驚悚隨三阿耨意、二者觸毛便能如上、三者觸肉然後乃驚、四者微

骨然後乃驚、無合喩云、初馬如聞二他聚落無常、即能生厭、次馬如聞三已聚落無常即能生厭、三者如聞三已聚落無常、即能生厭、四者如觸、已身觸苦方能生厭。」彌阿含經にも云云を見よ。

*もくれん 佛の弟子目連は竹杖外道に打殺され(用明天皇) 〔目連〕摩訶目連連 (Mahamandakalyana) の略、釋尊十大弟子中の一人で、神通第一であつたといふ。この尊者が竹杖外道に殺されたこと曾一阿含經に見えたる。

もんもんぶどう八萬四千、爲滅無明果業因、利劍即是彌陀號、一聲稱念罪皆除(津戸三郎)

佛陀の法門分れて八萬四千の多きに達すれども、蓋し衆生無明の罪業因及び無明の罪業因から生じる迷苦の果報を滅除する爲には、一聲の稱名念佛(彌陀無明)を致すべきである、念佛の功徳は能く罪業迷苦を斷滅すること、恰も鋭利な劍の物を斬除するやうである。一聲の稱名念佛の功力によつて罪及一切の罪は悉く滅除されることである。唐善導大師禮讚偈に、「門門不同八萬四千、爲滅無明果業因、利劍即是彌陀號、一聲稱念罪皆除。」

夜摩天の契りは抱き合ふと聞(五人兄弟)

〔欲界の四王初利天云云〕とをつを見よ。契界の四王初利天、夫婦枕の夜摩天の契りは抱き合ふと聞く、兜率天には手を取り交はし、樂變化天の戀衣、つまとつまとが忍ぶ夜は、

互ににつと打笑ひ笑めるを戀のしるしとは、それが善いやら悪いやら、人界よりは知らねども、これで満足するとかや、他化自在天の妹背には、顔と顔とを見るばかり(五人兄弟)

欲界とは、食欲睡眠欲淫欲の満足を求める念強き有情の住める世界をいふ。果林子のこの文は、欲界の六天四王天、初利天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天の情事を見るたものである。俱舍論卷十一に、「論曰、唯六欲天受妙欲境、於中初二依地居天、形交成、姪與人無別、然風氣滯惱便除、非不如三人間、有餘不淨、夜摩天業縛抱成姪、觀史多天俱由執手、樂變化天唯相向笑、他化自在相親成姪。」觀史多天は兜率天ともいふ。」とそつを見よ。

利劍即是彌陀 利劍即是と聞く時は死する刃も彌陀の縁(生玉) 利劍即是彌陀號、一聲稱念罪皆除(娥)

〔利劍即是彌陀號〕一聲稱念罪皆除は般舟讚にある文である。阿彌陀佛名號の功力は無明の煩惱を斷絶すること利劍の物を斬去るやうである、一聲の稱名念佛を唱へれば罪障悉く滅除するの意である。

梁帝が龍を抜く、梁帝が龍を投げ、項羽が山を抜く勢(女夫池)

梁の武帝が觀音施法を始め、その法を修して、后妃の死して巨蟒となるを救つたことといふたのであら。僧法小序に「梁武帝修此法、救皇后妃死爲巨蟒。」

りやつかう、りやつかう不思議のうき否はかせ(女護鳥)

〔りやつかう〕の誤。「りやくこふふしぎ」を

*流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲、眞實報恩者(娥)

僧侶が棺前多くは此文を誦す。欲界色界、無色界の三界に流轉することができないからほだされつて其妄情を斷つことができないからである。その妄情を棄つて證悟の境界に入るは、一切衆生の恩を報する者であるとの意。この經文は平家物語の卷十、維盛の出家の條にも引用されてゐる。「きおんにむむ」を見よ。

我が手の内に雀あり、生きたるか死したるか言うて見られよ(川中島)

雀が生きてゐると言はば、手の内を握り殺して放つて、又死んで言はば、手の内を握り殺して見せ、これぞ兩刀論法(Duenna)である。佛果園悟禪師聖錄卷一に「有一外道、手握雀兒、來問世尊云、且道某甲手中雀兒、是死耶是活耶、世尊遂闢門闢云、你道我出耶入耶、外道無語、遂禮拜。」

*あしやぢやうり(彌九)卯月潤色

云云」の歌を釋して、「三十一文字の表に旅の姿を列ね、裏にはすなはち會者定離愛別離苦の理」と云へるは、百人一首抄に「これやこのとは逢坂の関におちつく五文字なり、面は旅客の往來のさまなるものなり、下の心は會者定離の心なり云云」とあるに據つたのである。

（「會者定離」は太平記にも見え、又これと同義句は涅槃經にもある）。